

569-14



1200501516392

9

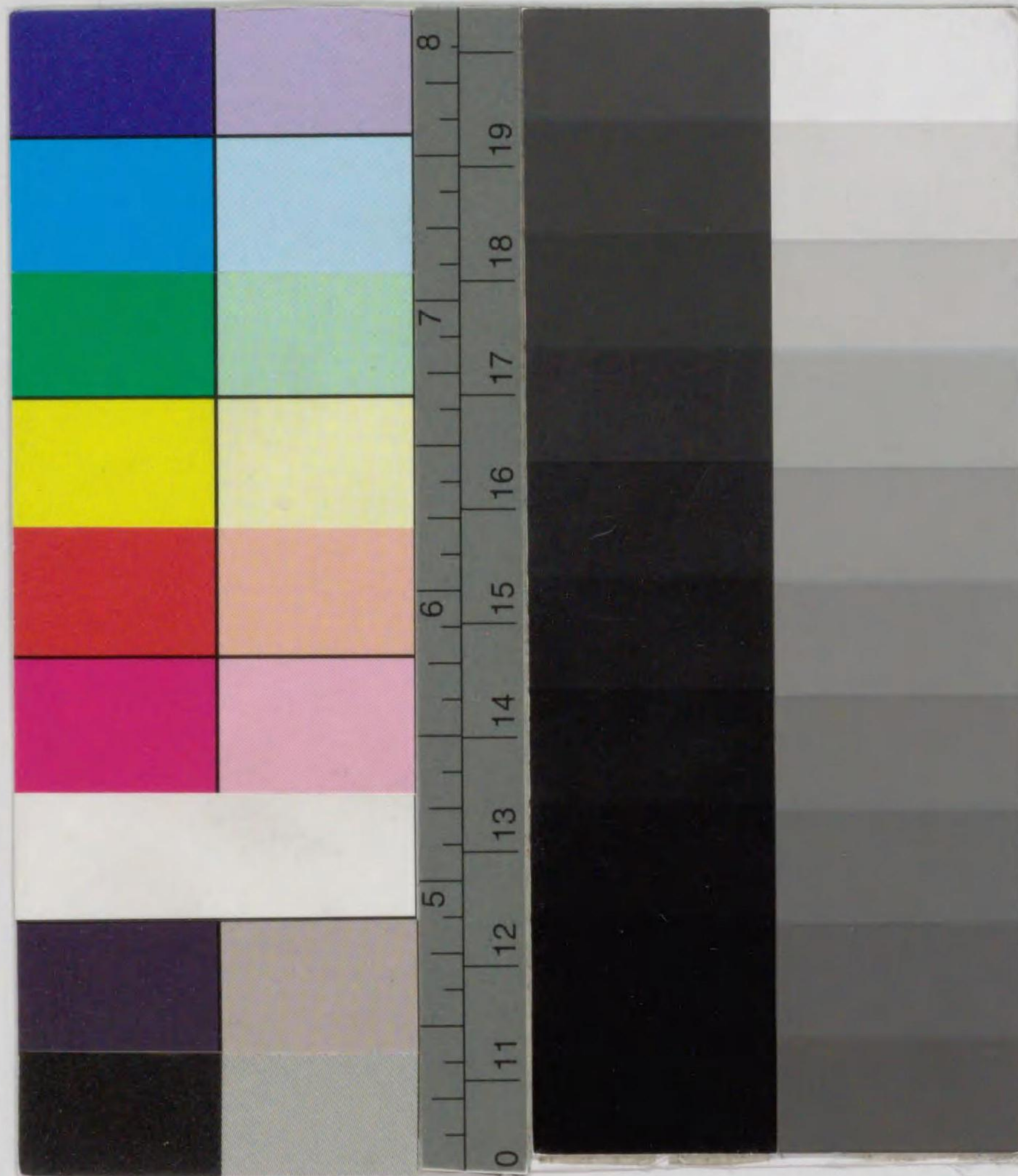
岩波文庫

222

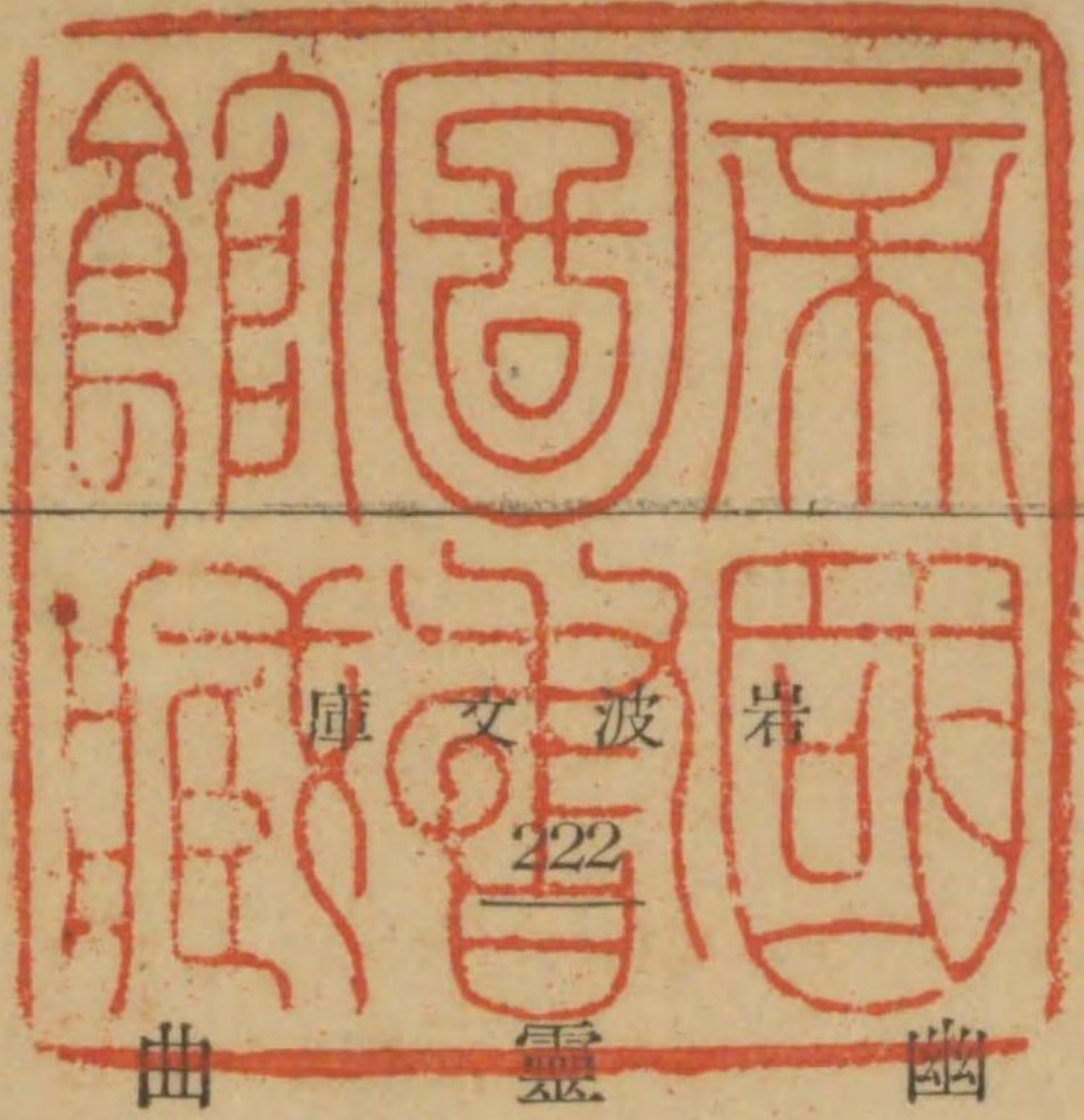
幽靈曲

作クルベトンリトス  
譯隆豊宮小

岩波書店







岩波文庫

222

幽 靈 曲

作クルベトソリス  
譯 隆 豐 宮 小



岩波書店





幽

靈

曲



Small, faint text impression, possibly a date or a small inscription, located below the large square seal.





幽  
靈  
曲

第  
一  
幕



569-14

## 舞臺

現代式住宅の表側の一階と二階、もつともそれは一階では圓形のサロンで終り、二階ではバルコンと旗竿とで劃される、家の一角。

圓形のサロンの明け放した窓から、帷とせりが掲げてあると、若い女の白い大理石像が見える、像は棕櫚竹で取巻かれ、輝かしく日光に照されてゐる。左手の窓には鉢植のヒアシンズが置いてある、藍と白と淡紅と。

二階のバルコンの手摺に藍色の絹の掛蒲團と白い枕二つとが懸つてゐる。左手の窓には白いシートが懸けてある。

朗らかな日曜の朝である。

家の前の前景に緑色のベンチが置いてある。右手の前景に共同噴水、左手に廣告塔。

左手の後景には家の入口がある、階段が見える、段段は白大理石で出来てゐて、手摺はマハゴニ、眞鍮の棒が使つてある。外そとの、入口の兩側には大きな圓い木鉢に植ゑた月桂樹、



が列んでゐる。

入口の左手に、地面とすれすれの高さの、反射鏡をつけた窓がある。  
圓形のサロンのある角は、奥の方へ通つてゐる、横町に口があいてゐる。

人 物

老 人

支配人フムメル

大 學 生

アルヘンホルツ

牛乳配達の娘

(幻影)

門番の神さん

死んでゐる人

領事

黒衣の女イ

領事と門番の神さんとの間の娘

大 佐

木 乃 伊

大佐夫人

令 嬢

大佐の娘(實は老人の娘)

貴 族

男爵と呼ばれ、門番の娘と約婚してゐる

許 嫁

フムメルの昔の許嫁、白髪の老女



ヨハンソン

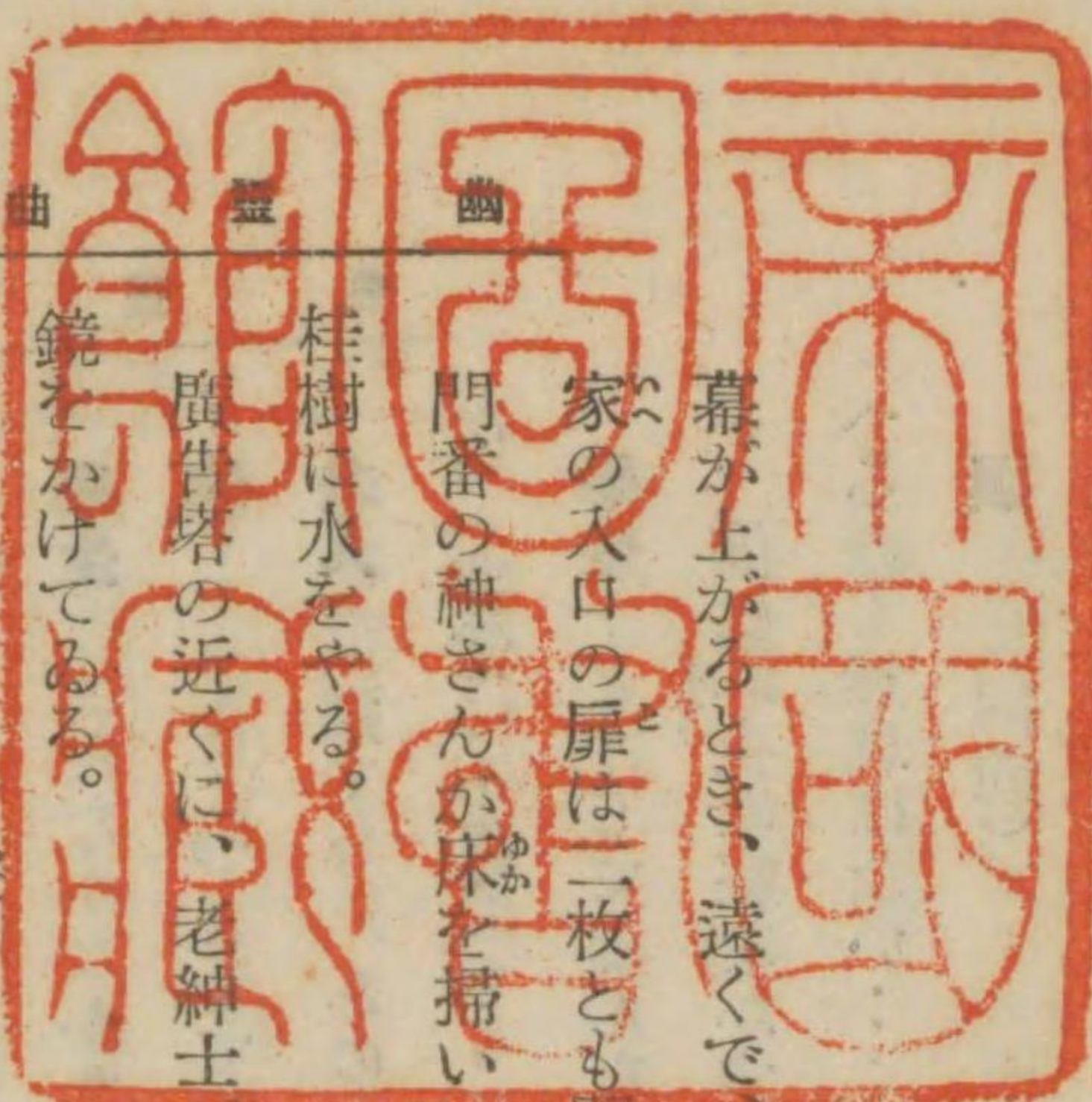
フムメルの召使

ベングトソン

大佐の召使

料理番の女

大佐の召使



幕が上がるとき、遠くで、方方の教會の鐘が鳴る。

家の入口の扉は一枚とも開かれてゐる、黒い著物を著た女がじつと階段に立つてゐる。

門番の神さんか床を掃いてゐる、それから扉の眞鍮を磨く、それがすんで入口の前の月

桂樹に水をやる。

廣告塔の近くに、老紳士が片羽車に乗つて、新聞を讀んでゐる、髪が白い髭が白い、眼

鏡をかけてゐる。

牛乳配達の娘が角から来る、瓶を針金細工の籠に入れて肩にかついでゐる、夏の著物で、

茶皮の靴、黒の靴下、白の大黒頭巾をかぶつてゐる。

牛乳配達の娘 (大黒頭巾をぬぎ夫を噴水の側面にぶら下げる、額の汗を拭き、柄杓で

ぐつと水を飲み、手を洗ふ、水鏡をして髪を直す)。

(汽船の鐘が鳴る、近くの教會のオルガンの低音が時折しんとした中を押し分けて来る)



(娘が身仕舞を済ませて、一分許りしんとしたあとで)  
學生 (が左手から来る。眠不足な顔をしてゐる、顔もあたつてゐない。噴水を目かけて行く)。

(間。)

學生 柄杓を貸してくれ給ひな。

娘 柄杓を自分の方へ引き寄せる)。

學生 まだなかなかかい。

娘 (ぎよつとして彼を視る)。

老人 (獨で)。あの男は誰と話してゐるんだ？。——誰も見えないのに。——氣狂かな。(非常に不思議さうに、注目し續ける)。

學生 どうしてそんなに僕の顔を見るんだ。僕そんなに怖い顔してゐるかい。……さうさ、僕は昨夜は寐なかつたさ、だから、うちを外にして飲みあるいたものだらうと君が考へるのも無理はない……

娘 (同前)。

學生 ポンチを飲んだんだ、とでも思つてゐるだらう。——僕ポンチ臭いかい。

娘 (同前)。

學生 僕は顔もあたつてゐない、そりやあ……。君、水を一杯飲ませ給へ、飲ませて呉れても可いんだよ。

(間。)

學生 さあ、かうなると話さない譯には行かない、僕はね、昨夜一晩中怪我人の繃帯をしたり病人の介抱をしたりしたんだよ、といふのは、實は僕は昨夜の家崩れの現場にゐたんだ。……さあ是が打ち明けたところだよ。

娘 (柄杓を濯いで、水を汲んで渡す)。

學生 ありがたう！。

娘 (じつとしてゐる)。

學生 (徐かに。) お願ひがあるんだが、聽いてくれないか。

(間。)

學生 外の事ぢやないが、御覽の通り、僕の眼は充血してゐる、ところが僕の手は怪



我人や死人にさはつた手なんだから、是で眼をいぢるのは危険だ。……君一つ僕の綺麗なハンケチを出し水で濕して僕の眼を洗つてくれないか。——くれないか。慈悲深きサマリアの女になつてくれないか。

娘 (躊躇しながら、頼まれた事をする)。

學生 君、ありがたうよ!。墓口をひつぱり出す)。

娘 (夫を拒む動作をする)。

學生 これは悪かつた、何しろ僕は寐惚けてゐるもんだから……

娘 (去る)。

老人 (學生に)。だしぬけに話しかけて失禮ですが、今伺ふと、君は昨宵の變事の場ばに合せたんださうですね。……私はたつた今それを新聞で讀んだ所です……

學生 もう新聞に出てゐますか。

老人 ええ、すつかり。君の寫眞も出てゐる、唯その感心な學生の名前の分らないの

が残念だとある……

學生 (新聞を覗く)。さうですか。それは私です!。さうです!

老人 君は今、誰と話をしてゐたのです?

學生 あなたには見えなかつたんですか。

(間。)

老人 無駄でなければ、伺ひ——君のお名前を伺ひたいんだが。

學生 そんな事なんにもならないぢやありませんか。僕晴がましい事は嫌ひです、褒められると、又くさされる!。人を引き摺り下ろす技術は、今日非常に發達してゐます。……それに私は報酬を求める氣はありません……

老人 金があるから?

學生 どう致しまして!。正反對です!。私は一文なしです!

老人 妙な事をいふ様だが。……どうも君の聲は前に聞いた事がある様な氣がする。

……私に子供の自分からの友人があつたが。……君はあの豪商のアルヘンホルツの何かにあたるんぢやないかな。



學生 あれは僕の父です……

老人 不思議だなあ、運命といふものは……私は君を見た事がある、その時分君はまだ赤ん坊だった、然もその時分の君の家は苦しい境遇だった……

學生 さうです、私は恐慌時代に生れたのださうです……

老人 その通りだ！

學生 失禮ですがお名前は？

老人 私は支配人フムメル……

學生 あなたが……？。ぢや知つてゐます……

老人 お父さんのうちで君は私の名前を幾度も聞いてゐる筈だ。

學生 ええ！

老人 然も多分或反感を持つて？。

學生 (黙つてゐる)。

老人 いや、無理もない！。——お父さんを破産させた者は私だとも、言はれてゐたに違ひない。——愚かな投機の爲に破産したものは、誰でも、此方で騙せなかつた人達か

ら、破産させられたと思ふものなだから。(間) 事實はかうなんだ、お父さんは、當

時の私の貯蓄の全部を、一萬七千クローネンの金を私から捲き上げて了つた。

學生 妙なものですな、同じ話が全然矛盾する二通りの話し方で話されるのだから。

老人 君は、私が嘘をついてゐるのだとは、まさか考へてはゐないだらう。

學生 どつちを信用すれば可いのでせう？。父は嘘はつきませんでした！。

老人 それはさうに違ひない、父といふものは決して嘘をつかないものなのだから……

然し私も父なんだ、従つて……

學生 何所へ持つて行く積なんです。

老人 私はお父さんを窮境から救つて上げた、然るにお父さんは、恩を受けた者の怖しい憎みを以つて、その恩を私に返した……お父さんは自分の家族の者に、私の事を悪くいふ様に教へ込んだ。

學生 あなたの方で父を恩知らずにして了つたのぢやないんですか、餘計な恥をかかせてその助力を仇にして。

老人 君、凡ての助力は恥をかかせる事だよ。



學生 あなたは私にどうしろと仰有るのです？

老人 金を返せといふのぢやない、ただ君が私の爲に一寸した事をしてくれさへすれば、私は夫丈で満足する。御覽の通り、私は脚萎えだ、是は私自身の罪だとも云はれ、また親の罪だとも云はれてゐる、が、私は、是は意地の悪い人生そのもののせみだと思ひたい、一つの係蹄わなをよけて通ると、きつと片方の係蹄わなにかかる様に出來てゐるのだから。――それで私は階段をあがる事が出來ない、綱をひつばつて鐘を鳴らす事が出來ない、それで君に頼むのだ、手をかしてくれ給へ！

學生 私に何が出來ます？

老人 さしあたり、この車を塔の傍へ押して行つてくれ給へ、廣告が讀める様に、今夜どんなものを演るか見たいんだから……

學生 (車を押す)。誰も傍についてゐる人はないんですか。

老人 ゐるにはゐる、が、ちよつと用足しにやつてある……すぐ歸つて來る……君は醫科かい。

學生 いや、語學をやつてゐます、もつとも何になるのか、自分にも分らない……

老人 へえ！――君は數學が出來るか。

學生 ええ、少しは。

老人 それは結構だ！――君は職に就きたいのだらうな。

學生 ええ、無論です。

老人 よろしい！――(或廣告を讀む。) マチネーに『ヴルキューレ』がある……

：すると大佐は娘を連れて行く、あの男はいつも六列目の一番端に坐るんだから、君をその隣に坐らせよう……。君そこの公衆電話へ行つて、六列目の八十二番の切符を一枚注文してくれ給へ！

學生 今日の午私がオペラへ行くんですか。

老人 さうだ！。さうして私のいふ通になるんだ、さうすれば君には好い事がある！。私は君を仕合しあはせに金持に又人から尊敬される様なものになりたいと思つてゐる。勇敢な救助者としての君の昨日の振舞は、明日君を有名にする、すると君の名前は非常に値うちのあるものになる。

學生 (公衆電話の方へ行きかかる)。是は面白いアドベンチュアだ……



老人 君はスポーツをやるかい。

學生 ええ、スポーツは私の病です……

老人 ぢやその病は君の仕合に變る！——さあ電話をかけて來給へ！（新聞を讀む。）

（黒い著物を著た女が往來へ出て來て門番の神さんと話しをする。老人は聽耳を立てる、然し見物には些しも聞えない。）

學生 （歸つて來る。）

老人 注文した？

學生 約束して置きました。

老人 あすこの家を君知つてゐるかい。

學生 眼に著いてはゐます……。昨日、あの窓に日がさし込んでゐる時分に、此所を

通りました……。あの家の中の、美しさと奢りとを一一事細かに空想して見て、私は仲間  
の者にさう云ひました、あの五階の家を持つてゐるのは誰だらう、きつと若い美しい妻君  
があつて、二人の小さな可愛い子供があつて、二萬クローネンの利息が這入つて來て……

老人 そんな事を云つたのかい。そんな事を云つたのかい。實はね。私もあの家が好

きなんだよ……

學生 あなたも家を見ちやいろんな空想をするんですか。

老人 うん！。もつとも君とは違ふがね……

學生 あなたは、あすこに住んでゐる人達を御存知なんですか。

老人 みんな知つてゐる。私位な年輩になると凡ての人間を知つてゐるものだ、その  
お父さんも又そのお祖父さんも、さうしてみんなと何所かできつと續き合ひになつてゐる。  
……私は丁度八十になつた——然し誰も私を本當には知つてゐない——私は人間の運命と  
いふものに興味を持つてゐる……

（圓形のサロンの帷が擎げられる。平服の大佐が窓の向うに現はれる、寒暖計を檢め、  
また部屋の奥へ引き返す、大理石像の前に立ち停る。）

老人 見給へ、あすこに大佐がある、君は今日午あの男の隣に坐るのだ……

學生 あれが大佐ですか。何がなんだか私には分らない、丸でお伽噺の様な氣がする

……  
老人 君、私の一生はお伽噺の本の様なものだよ、お伽噺はそれぞれ違ふけれども、



みんな一本の糸で繋がつてゐる、さうしてライトモチーフは規則正しく繰返される。

學生 あすこのあの大理石像は誰ですか。

老人 あれは無論あの男の妻君だ……

學生 その妻君といふのは可い人だつたんですか。

老人 まあ、さうだよ！——さうだよ！——

學生 すつかり言つて了つて下さい！

老人 君、我我に人を批判する事は出来ないのだよ！。それに、若し私が、あの男は妻君を殴つた、妻君が出て行つた、又歸つて来て改めてあの男と結婚した、さうして今ではあすこの家の中に木乃伊の様に坐つてゐて自分の像を拜んでゐる、と君に話して聞かせるとしたら、君は屹度私の事を氣狂だと思ふに違ひない。

學生 何の事だか僕には分らない！。

老人 さう思ふのも無理はない！。——それからあすこにヒアシンスの窓がある！。

あすこにはあの男の娘が住んでゐる……今馬で出かけてゐるが、もうぢき歸つて来る……

學生 あすこで門番の神さんと話しをしてゐる、黒い著物の女は誰ですか。

老人 さやう、あれはね、君、少し込み入つては来るが、あれは、あすこの、白いシ  
1ツの見える、あの上の死んだ人と關聯してゐる……

學生 それは一體何者だつたんです？。

老人 人間だつたのさ、我我同様の。唯然しあの男の一番の特徴は、あの男の虚榮心  
だつた……若し君が日曜子だつたら、今にあの男が扉口を出て半旗にしてある領事の旗を  
眺めに來る所が見えるだらう、といふのは、あの男は領事だつた、さうして王冠や獅子や  
帽子の飾や華やかなバンドが好きだつた……

學生 あなたは日曜子つて仰有いましたね——實は私は日曜日に生れたのださうです

老人 そんな！。君が？。……さうかも知れない。……君の眼の色にそれが現はれて

ある。……然しそれなら君には、外の人に見えないものが見える筈だ、君さういふ事に氣  
がついた事はないか。

學生 外の人に何が見えるか、僕に分る筈はないんだが、然しよく……さうだな。そ  
んな事言ふもんぢやないな！。



老人 屹度さうだらうと思つてゐた！。然し君、私には話しても構はないんだよ……といふのは、私にも——さういふ事が出来るんだから……

學生 例へば昨日きのうです！。何といふ譯もなくあの、あとで家の崩れた、人の餘り知らない町へ私は引つばられて行きました……私は其所へ行つて、今まで見た事もない、その建物の前に立ち停りました。……すると壁に破れ目がある、間の天井の所がめりめりと云つてゐる……私は跳り出して、壁傳ひにある一人の子供を行きなり引き寄せたのです。その次の刹那に家が瓦落瓦落と崩れました……私は助かつた、然し、子供を抱いてゐると計り思つてゐた私の腕には、なんにもゐなかつたのです……

老人 そりやさうだらう。……君に一つ訊きたい事がある、さつき君はあの噴水の所で色んな身振をしてゐたが、あれはどうしたんだ？。なぜ獨言を云つてゐたんだ。

學生 あなたには私が話をしてゐた牛乳配達牛乳配達の娘が見えなかつたんですか。

老人 (ぎよつとする)。牛乳配達牛乳配達の娘？。

學生 ええ／＼、私に柄杓を貸してくれた。

老人 さうか？。ぢやさういふ風で？。……私には見えなかつた、

別な事

が出来る……

(今、白髪白髪の女が反射鏡のついてゐる窓に凭りかかる。)

老人 あの窓のお婆さんを見給へ！。見える？。——よろしい！。あれは元私の許嫁いひなづけだつた、六十年前に！。私は二十歳はたちだつた！。——心配し給ふな、あの女に私は分らない！。私達はお互に毎日毎日顔を合せてゐる、然しその事が私に何の感じも與へない、そのくせ私達はその當時は永久に渝らないといふ事を誓つた——永久に！。

學生 随分馬鹿ばかだつたんですね、昔の人は！。我我はもうそんな事を自分の女に向つて言ひません！。

老人 お言葉だが、君、我我は外に言ひ方を知らなかつたんだ！。——然し君、あの婆さんが昔若くて美しかつたといふ事が、考へられるかい。

學生 とても考へられません！。もつとも、あの眼の光りは美しい、眼は此所からよくは見えないけれども！。

(門番の神さんが籠かごを持つて出て来て縦の枝を撒き散らす。)

老人 神さんだな！。——あすこの黒い著物の女はあの神さんと死んだ人との間に



来た娘なんだ、その爲めあの神さんの亭主は門番の地位にありついた。……黒い著物の女には求婚者がある、是は身分のある男だ、女は金持になれるのを待つてゐる。……といふのは、その男は今妻君と別れた計りでね、然も妻君はその男と別れる爲にその男に家を一軒やつた。この身分ある求婚者は従つて死んだ人の婿になる譯だ、あすこを見給へ、あのバルコンに干してあるのはその男の蒲團と枕とだ。……随分込み入つてゐるだらう！

學生 恐ろしく込み入つてゐます！

老人 さうだ、込み入つてゐる、内も外も。見た所は單純だが。

學生 然しその死んだ人といふのは一體何なのです。

老人 たつた今君が訊いて、私が返事をした計りぢやないか、此所からは見えないが、あの角の向うに裏口がある、裏口には貧乏人が一かたまり來てゐる、あの男の助けてやつた貧乏人どもが……あの男が思ひ出した時に助けてやつた……

學生 ぢや慈悲深い人だつたんですね？

老人 うん……偶には。

學生 いつでもぢやないんですか。

老人 さうぢやない！……さういふのが人間なのだ！君どうかもう少し車を押してくれ給へ、日が當る様に、凍えさうだ。人間身體からだが動かせなくなると、血が凝滯する。……私は屹度近いうち死ぬに違ひない、夫は私に分つてゐる、然しその前に私はまだ少しして置きたい事がある……。君手を出してくれ給へ、さうして觸つて見てくれ給へ、こんなに私は冷たい……

學生 それほどでもありません！（尻込みをする。）

老人 逃げないでくれ給へ、私は疲れてゐる、私は一人ぼつちだ、然しいつでもさうだといふ譯でもなかつた、是は君にも分るだらう！私は私のあとに無限に長い——無限に長いライフを持つてゐる——私は多くの人間を不幸にした又多くの人間から不幸にされた、片方が片方を帳消しにしなくてはならない——が、私の死ぬ前に、私は君を幸福にしてあげたい。……お互の運命は、君のお父さんによつて——それからもつと外のものによつて——結びつけられてゐる……

學生 ですが手を放して下さい！。あなたは私の力を吸ひ奪つて了ふぢやありませんか、私を冷たくして了ふぢやありませんか！。あなたは何をしろと仰有るんです？。



老人 まあ待ち給へ、今に分るから、成程と思ふから……。あ、令嬢がやつて来た：

学生 大佐の娘さんですか。

老人 さうだ、娘だ！。あの子を見てみ給へ！。君は今迄にこれほどの傑作を見た事があるかい。

学生 あの部屋の大理石像に似てゐますね……

老人 あれはお母さんだから！。

学生 あなたの仰有る通りだ——女から生れた女のうちに、私は未だ曾てこんな女を見た事がない。……このひとを祭壇へ又家庭へ連れて行く事を許される男は、ほんとに幸福です！。

老人 見てゐ給へ！。誰にでもあの女の美しさが分るとは行かない……。よろしい、さう書き誌しよされてゐるのだ！。

令嬢 (左手から来る、現代英吉利風の乗馬服、傍目も振らず、家の入口まで徐かに入つて行く、そこで立ち停まり二言三言門番の神さんに口を利く、それから家の中に這入る。)

学生 (片手で眼を蔽ふ)。

老人 君は泣いてゐるのか。

学生 希望の持てない者にとつて、存在するものは絶望丈です！。

老人 私は扉とも心臓もあける事が出来る、私の意志に手がありさへすれば。……僕に仕へ給へ、さうすれば君の思ひの儘になる……

学生 それは契約なんですか。私の魂を賣れといふのですか。

老人 なんにも賣るのがぢやない！。——まあ聴き給へ、私は一生を通じて取つて計り来た、今私は與へたい切望に驅られてゐる！。與へたい！。しかし誰も受けてくれない！。……私は金持だ、非常に金持だ、ところが跡取が一人もない、私を死ぬ程に苦しめるやぐざ者が一人あるきりだ……。君、私の生きてゐる間、私の子になつて、私の跡取になつてゐてくれ給へ、私の様に、人生ゲイザインを、少くともある距離から、享樂し給へ……



學生 僕何をすれば可いのです？。

老人 第一に『ブルキユーレ』を聴く事！。

學生 それはもう定つた事ぢやありませんか——それから？。

老人 今夜君はあすこの圓形のサロンに坐る！。

學生 どうして僕があすこに行けるのです？。

老人 『ブルキユーレ』で！。

學生 あなたはどうして私をメデイアムに選んだのです？。前から私を知つてらしたんですか。

老人 無論さうだ！。私は長い事君に眼を著けてゐたのだ。……だが君、あすこのバルコンを見給へ、領事が死んだから、女中が旗を半旗に吊つてゐる。……それから女中は掛蒲團と枕とを裏返す。あの藍色の掛蒲團を見給へ！。——あの蒲團の下で二人は寝たんだ、が、今ではその内の一人だけが寝てゐる……

令嬢 (著物を換へて窓の所に現はれ、ヒアシンスに水をやる)。

老人 あすこに私の可愛い娘がある、見て呉れ給へ、見て！。あの子は花と話しをし

てゐる——あの子自身が藍色のヒアシンスに似てゐやしないか？。あの子はヒアシンスに水だけしかやらない、然もヒアシンスはその水を色と匂ひとに變へる。……や、大佐が新聞を持つてやつて来た——家崩れの所をあの子に見せてゐる。……君の寫眞をさしてゐる！。あの子は冷淡な子ではない……あの子は君のした事を讀んでゐる。……なんだか翳つて来た様だ、降らなければ可いが！。ヨハンソンが早く歸つて来ないと、降つたら、ひどい目に會ふ……

(空が翳つて暗くなる、反射鏡のそばの婆さんは窓を閉める。)

老人 私の許嫁が窓を閉めるな……七十九……あの反射鏡があの女の使つてゐるたつた一つの鏡だ、自分では鏡を使はないんだから、見るのは外の世界だけだ、しかも二方丈から、ところが世界にはあの女が見える、その事にはあの女は氣がつかかなかつた……が、ともかく美しいお婆さんだ……

(今、死んだ人が死衣裝を著て入口に現はれる。)

學生 おやつ、ありや何だらう。



老人 何が見える？

學生 あなたにはあの死んだ人が見えませんか、入口の。

老人 私にはなんにも見えない、然しもう出て来さうなものだとは思つてゐた！。話してくれ給へ……

學生 往來へ出て行きます……（間。） 振返つて旗を眺めてゐます……

老人 言はない事ぢやない！。今にきつと花環の數も勘定する、名刺を一一讀んで見る。……來なかつた手合こそ災難だ！。

學生 角かどの所をまがります！。

老人 裏口の貧乏人の數を勘定しに行くのだ……貧乏人は結構裝飾になる、「多くの貧民柩に添ひて死者を祝福せり」なんだからな。ところが私はあいつを祝福してはやらない。あいつは大籠棒だつた……此所だけの話だが。

學生 でも慈善氣のある……

老人 慈善氣のある籠棒だよ、いつも立派なお葬ひの事計り考へてゐて……自分の最後に氣がついた時あいつは、大急ぎで國庫から五萬クローネンの金をくすね取つた……

……今あいつの娘は餘所にお嫁に出る事になつてゐる、伺ひたいものだ、あいつの遺産は……あいつには我我の話が一一聞える、が、聞きたけりや聞かしてやる！。——や、ヨハンソンが來た！。

（ヨハンソン左手から來る。）

老人 報告！。

ヨハンソン （話しをする、然し外の人には聞えない）。

老人 さうか、留守か！。お前は馬鹿野郎だよ！。——それで電報は？。——一つもない！。——それから！。——晩の六時？。よろしい！。——番外？。——姓名！。大學生アルヘンホルツ、生れは——雙親——結構。——降り出した様だな……あの男は何て云つた？。——さうか、さうか！。——厭だといふのか。——厭でも應でも構はない！。——や貴族がやつて來る！。——ヨハンソン、角の所まで押して行つてくれ、貧乏人どもの云つてゐる事が聞きたいから……それからアルヘンホルツ、君は此所で待つてゐてく



れ給へ。可いかい？——ヨハンソン、急いだ、急いだ！

(ヨハンソン車を角の所へ押して行く。)

學生 (じつと立つて、丁度花の鉢の土をこなししてゐる令嬢を眺める。)

貴族 (喪服で現はれ、歩道をあちこちとあるいてゐる黒い著物の女に話しかける。)

でも、今更どうする事も出来ないぢやありませんか？——待つより外はない！

貴女 私<sup>わたくし</sup>は待てません！

貴族 そんなですか？。ぢや田舎へ旅行なさい！

貴女 厭です。

貴族 こつちへ入らつしやい、話が人に聞えるから。

(二人は廣告塔の方へ行き、聞えない様に話しを續ける。)

ヨハンソン (右手から、學生に)。主人が貴方に、今一つの事を忘れない様に願ひ

ますつて！

學生 (徐かに)。それよりも君、君の主人は何者だか、僕に教へてくれ給へ。

ヨハンソン さうですね！。主人はいろんなものです、何もかもして來てゐる……

學生 賢い人なんですか。

ヨハンソン でも、賢いといふのはどういふ事ですか？。主人は一生の間日曜子<sup>にちようつこ</sup>を捜し

てゐたのだ、と自分で言つてゐます、然しそれは別に本當である必要もない……

學生 どうしようつていふんです？。金が欲しいのでせうか。

ヨハンソン 支配したいのです。……主人は神様のトールの様にあの車に乗つて一日<sup>いちにち</sup>うろつき廻つてゐる……主人はいろんな家に見當をつけては、それを根こぎにし、往來をつけ、市場<sup>いちば</sup>を作ります。また家の中に押し入り、窓から這ひ込み、人間の運命をおもちやにし、自分の敵を殺します、さうして決して容赦しないのです。あなたには想像も出来ないだらうが、あれであの小さな足萎えさんは昔はドン・ファンだつたんですぜ、もつとも始終妻君から出て行かれ通しぢやあつたけれども。——





學生 それとこれとどう繋がるのです？

ヨハンソン あの男は、女に厭きて來ると、女の方から出て行く様に仕向ける、さういふ狡い男です。……然し今ではあの男は云はば人間市の馬泥棒です、あの男はいろんな手で人間を盗むのです。……あの男は文字通りに正義の手から私を盗み出した……といふのは、私はある罪過を犯したのです、ふむ、それを知つてゐるのはあの男だけだつた。私を牢屋に入れる代りに、あの男は、私を自分の奴隸にしてつた。私は、唯喰はせて貰ふ丈の事で、あの男の下男になつてゐるのです、然もその喰物さへ碌なものぢやない……

學生 一體あの人はこの家で何をやる氣です？

ヨハンソン それはお聞かせする譯に行かない！。第一非常に込み入つてゐて……

學生 遁げ出す方がよささうな氣がする……

ヨハンソン お嬢さんが、御覽なさい、腕環をなくしましたよ、窓から轉がり落ちた……

(令嬢が開いた窓から腕環を落つことす。)

學生 (徐かに出て行き、腕環を取り上げ、夫を令嬢に渡す、令嬢は膠のない禮の云

ひ様をする、學生はヨハンソンの所へ復つて來る。)

ヨハンソン さうですか、遁げ出しますか。……然しあの男から一度網を被せられると、さう易易とは遁げられませんよ。……それにあの男は天地の間に何物をも恐れない……もつともたつた一つ、はつきりいふと一人の人間が……

學生 待つて下さい、夫は多分私は知つてゐる！。

ヨハンソン あなたが知つてゐる筈はない。

學生 當てて見せます！。——それは……小さな牛乳配達の娘ぢやないんですか、あの人の恐れてゐるといふのは？

ヨハンソン 牛乳車に出會すと、あの男はいつでも顔を背けます……それから寐言を言ひます、あの男はいつかハムブルクにゐた事がある筈です……

學生 あの人を信じて可いでせうか。

ヨハンソン あの男の事は一切——信じて可いのです！。

學生 あすこの角の所であの人は何をしてゐるのです？

ヨハンソン 貧乏人のいふ事を立聴きしてゐるのです……ほんのひとこと種を植ゑつ



ける、小石一つぬきとる、仕舞にはあの家が崩れて了ふ……是は譬へですがね。……實はね、私はちやんと教育を受けた人間です、さうして本屋をしてゐたのです。……それで貴方は行つちまひますか？

學生 恩知らずになるのも心苦しい。……あの人は昔私の父を救つてくれたのです、さうしてあの人は今それに對してほんの僅かの報酬を要求してゐるのです……

ヨハンソン 報酬といふのは？

學生 『アルキューレ』に行つて来いといふのです……

ヨハンソン それはをかしい。……もつともあの男は始終新しく、いろんな事を思ひつくんだから。……御覽なさい、あの男は今度は巡査と話をしてゐる……あの男はいつでも警察を味方にする、警察を使ひ、利害關係の中に捲き込み、出鱈目の約束や臭はかして釣つて置く、然もあの男はいつでも必要な事は凡て警察から訊きとつて了ふ。見てゐて御覽なさい、日暮までには、あの男は、あの圓形のサロンに案内されるから！

學生 あすこで何をする氣なのです？。大佐に何用があるのです？。

ヨハンソン 私には、見當はついてゐる、然しはつきりとは分らない！。あすこに入

らつしやれば、自分で分る譯ぢやありませんか！。……

學生 あすこへ私が行ける筈がない……

ヨハンソン それはあなた次第です！。——『アルキューレ』に行つていらつしやい！

學生 それが路ですか。

ヨハンソン さうです、あの男がさう言つたのなら！。——あれを御覽なさい、あれを御覽なさい、あの男は戦車に乗つて凱旋する様に乞食どもから曳かれ来ます、乞食どもはあの男から一文の金も貰つてはゐない、唯あの男のお葬ひの折には何かがあるといふ事を臭はせられたに過ぎないのです！。

老人 (一人の乞食が曳く片羽車の上に立ちあがつて、復つて来る、外の乞食は車の後について来る)。

老人 諸君、昨日の變事に自分の生命を賭して多くの人命を救つた高貴なる青年に敬意を表し給へ！。アルヘンホルツ萬歳！。

乞食達 (帽子をとる、然し萬歳は云はない)。

令嬢 (窓からハンケチを振つて合圖をする)。



大佐 (自分の部屋の窓からじつと此方を見つめる)。

老人 (自分の窓のそばで立ち上がる)。

女中 (バルコンに出て旗を上まで引き上げる)。

老人 諸君、拍手し給へ！。今日は無論日曜だ、然し噴水の驢馬と畑の麥の穂とが我に滅罪<sup>アッフルチオン</sup>を與へてくれる。私はもとより日曜子ではない、然し私は占ふ力と救ふ力とを持つてゐる、私は嘗て一人の溺れた女の息を吹き返させた事がある……さうだそれはハムブルクでの事だつた、丁度今日の様な日曜の午前に……

牛乳配達の娘 (現はれる、然し學生と老人とだけにしか見えない。娘は溺れる者の様に両手を高くさし上げるさうして老人をじつと視つめる)。

老人 (腰を下ろす、愕驚の爲にがつくりする)。ヨハンソン！。押して行つてくれ！。早く！。——アルヘンホルツ、『ヱルキューレ』を忘れない様に！。

學生 どうしたといふのです。

ヨハンソン 今にわかります！。今にわかります！。



圓形のサロンの内部。背景に白のマジョリカ製の煖爐。煖爐の上には置時計と蠟燭立とが据ゑてある。右手はマハゴニの家具を備へ付けた緑色の部屋を見込む廊下。左手に像がある、棕櫚竹で取り巻かれ、帷で隠せる様になつてゐる。左手の背景にはヒアシンスの部屋へ行く扉がある、ヒアシンスの部屋には令嬢が坐つて讀んでゐる。緑色の部屋に坐つて書きものをしてゐる、大佐の脊中が見える。

ベングトソン (召使、制服を著て、廊下から来る)。

ヨハンソン (一緒に来る、燕尾服を著て、白の襟飾をしてゐる)。

ベングトソン ヨハンソン、私はマントを懸けて来るから、その間に食卓の用意を頼

むよ、君やつた事があるかい。

ヨハンソン なるほど私は晝間は戦車を押して廻つてゐる、是は君も知つてゐる、然し夜はお客さんの膳立をしてゐるのだ、それに、この家に這入りたいといふのは、年來の



私の夢だつた。……此所の人達は不思議な人達だ、ね？。

ベングトソン さうだな、多少變つてゐる、とは云へるだらう。

ヨハンソン 今夜は音楽會かね、それとも何か外の會かい。

ベングトソン いつもの幽霊會だよ、この會に我我はさういふ名前をつけてゐる。み

んなが茶を飲む、ひと言も口を利かない、たかだか大佐一人が話しをする。茶をのみながらみんなが一時にパンをかじる。夫が丁度屋根裏の鼠かなその様に聞える。

ヨハンソン なぜそんな名前をつけるのだ？。

ベングトソン みんな丸で幽霊みたいだから。……然もみんなは夫を二十年も續けて

來てゐる、いつでも同じ顔ぶれだ、さうしていつでも同じ事を言ふ、若くは恥かしい思ひをしない爲めに黙つてゐる。

ヨハンソン 妻君は出ないのか。

ベングトソン 出る、然し妻君は少し足りない。眼が光に堪へないといふので、いつ

も押入おし入れの中に這入つてゐる……ここにゐるのだ。……(壁の壁紙貼りの扉を指す。)

ヨハンソン その中に！。

ベングトソン さうだ！。少し變つてゐるつて、今云つたぢやないか。……

ヨハンソン どんな様子をしてゐる？。

ベングトソン 丸で木乃伊だよ。……君見たいか。(壁紙貼りの扉をあける。) ほら、

そこにゐる！。

ヨハンソン 呀つ……

木乃伊 (へらへらと)。なぜ戸を明けるのです。閉めて置かなくつちやいけないつて、言つてあるぢやありませんか……

ベングトソン (へらへらと)。タ、タ、タ、タ！。お馬鹿ちゃんは大人しくしてゐるものですよ、さうすれば御褒美が貰へます。——綺麗なガイガイさん！。

木乃伊 (鸚鵡の様に)。綺麗なガイガイさん！。ヤコブはゐますか。クルルレ！。

ベングトソン この女は自分を鸚鵡だと思つてゐるんだよ、もつともさう思ふのも無理はないんだが。……(木乃伊に。) ポリー、口笛を吹いてお聞かせ！。



木乃伊 (口笛を吹く)。

ヨハンソン 私は是までいろんなものを見て来た、然しこんなのは初めてだ!

ベングトソン わえ君、家が古くなると、穢が生えて来る、人間が長い間同棲してお互に苦しみ合つてゐると、馬鹿になる。この家の妻君は——しっポリー!。この木乃伊は四十年の間此所に坐つてゐる——同じ亭主と同じ家具と同じ親類と同じ友達と……  
(ベングトソンが木乃伊を又元の所へ締め込む。)

ベングトソン 此所でこの家の中でどういふ事があつたか——それは私は殆んど知らない。……見給へ、この像を——これが妻君なんだよ、若い時分の!

ヨハンソン へええ!。是があのお木乃伊か?。

ベングトソン さうだ!。——泣きたくなるぢやないか!。——ところでこの妻君は、想像の力かそれとも何か外の方かで、お饒舌な鳥の或性質を享けて了つた。——それでこの女は片羽や病人の、顔を見るのも嫌ふ。……自分の娘でさへ、娘が病氣だといふので、

顔も合はせない。……

ヨハンソン お嬢さんは病氣なのか。

ベングトソン 君は知らなかつたのか。

ヨハンソン 知らなかつた!。——それで大佐は、あれはどんな人だ?

ベングトソン 今にわかるよ!

ヨハンソン (像を眺める)。恐ろしい様だね、これが……。妻君は今幾つだね。

ベングトソン 夫は誰も知らない……が、噂によると、あの女が三十五の時に、あの女はやつと十九位にしか見えなかつたものださうだ……さうしてあの女は十九になつた計りだと言つて大佐をだました。……こここの此うちで。……ねえ君、あすこの長椅子の傍にある、あの黒い日本の屏風は何にするものか知つてゐるか。——あれは死屏風といつて、誰かの死ぬ時には、丁度病院の様に、その前に立てるものだ……

ヨハンソン まつたく怖ろしい家だ。……然もあの學生はパラダイスかなぞの様に此所へ来たがつた……

ベングトソン どの學生?。あ、さうか、あれか!。今夜此所に来る事になつてゐる。



……大佐と令嬢とがあゝの學生にオペラで會つた、會つて見て二人とも夢中になつて了つた。  
……ふむ……。……だが、訊くのは今度は私の番だ、君の主人といふのはなんだね？。片羽  
車のあの支配人といふのは？。

ヨハンソン あれも来るのか。

ベングトソン 招待されちやゝない。

ヨハンソン ぢや必要となれば押掛けで来るよ！。

老人 廊下に現はれる、燕尾服、絹帽、松葉杖、忍足で寄つて来て立聴きをする。

ベングトソン きつと古狸なんだ、な？。

ヨハンソン すれつからしだよ！。

ベングトソン まるで悪魔みたいぢやないか！。

ヨハンソン あいつは魔法を使ふにきまつてゐる！。——扉が閉しつてゐても這入つて

来るんだから……

老人 (進み出て、ヨハンソンの耳をつかまへる)。馬鹿野郎！。氣をつけろ！。(へべ

ングトソンに。) 大佐さんに私の來た事を取次いで下さい！。

ベングトソン ええ、ですが是からお客さんが見える筈になつてゐますので……

老人 夫は承知してゐる！。然し私の來る事も——およそは分つてゐた筈だ、お氣には入らないにしても……

ベングトソン さうですか？。お名前は？。支配人のフムメルさんですか。

老人 さうです！。

ベングトソン (廊下を通つて綠色の部屋に這入る、這入つたあとの扉を閉める)。

老人 (ヨハンソンに)。行つちまへ！。

ヨハンソン (躊躇してゐる)。

老人 行つちまへ！。

ヨハンソン (廊下へ消える)。

老人 (部屋を檢分する、さも感に堪へた様に像の前に立ち停る)。アマリエ！。……  
あの女だ！。……あの女だ！。……



(老人は部屋の中をあるいて廻るさうして品物を手にとつて見る、鏡の前で假髪かちんをなほす、像の所へ歸る。)

木乃伊 (押入から)。きれいなガイガイさん!

老人 (ぎよつとする)。ありや何だ!。鸚鵡がこの部屋にゐるのか。然し何所にも

見えない!

木乃伊 ヤコブはみますか。

老人 幽霊だ!

木乃伊 ヤコブ!

老人 氣味が悪くなつた!。——かういふ祕密がこの家うちには隠されてゐるのだな!。  
(或畫を眺めて押入に脊中を向けてゐる。これはあの男だ!。——あの男だ!。)

木乃伊 (老人の後ろに出て來てその假髪をひつばる)。クルルル—レ!。クルルル  
レかい。

老人 (飛び上がる)。呀つ!。——こりや何だ?

木乃伊 (人間らしい聲で)。ヤコブ、あなたなの?。

老人 まつたく私はヤコブといふ……

木乃伊 (感動を以つて)。私はアマリエよ!

老人 いや、いや、いや。……どうしてそんな事が……

木乃伊 私がそんなに見えますか!。さうでせうね?。——然しこんな顔をしてゐた時分もありました!。(像をさす。)生きてゐるといふ事は、ありがたい事です。……私は大抵は押入の中で生きてゐます、見るのがいやだし、見られるのがいやだから。……しかし、ヤコブ、あなたは此所で何を探してゐるのです?

老人 私の子供だ!。私達の子供だ……

木乃伊 あの子は向うにゐます!

老人 何所に?。

木乃伊 向うのヒアシンスの部屋に!

老人 (令嬢を眺める)。さうだ、あれだ!

(間。)

老人 なんて言つてゐる、あの子のお父さんは?。お父さんつて、あの大佐は!。お



前の旦那は。

木乃伊 私はあの人に對して怒つた事がありました、その時私は何もかも言つて了ひました……

老人 さうしたら？

木乃伊 あの人には信じませんでした、さうして「自分の亭主を殺さうと思ふと、女は皆そんな事をいふものだ！」と言ひました。然し何と言つてもこれは怖ろしい犯罪です。あの人の一生は賈物にされたも同様です、一生ばかりか系圖までも！。貴族年鑑を讀んで見る度に私は考へます、あの人は下女かなその様に賈の教會證明を持つてゐるのです、是は分れば懲役にやられる程の罪惡です。

老人 それはみんながやつてゐる。考へて見ると、お前だつて生れた年を胡魔化してゐた筈だ……

木乃伊 あれは母から教へられた事です——私の罪ぢやありません！。然し私達の犯罪で、一番罪のあるのはあなたです……

老人 いや、この犯罪を喚び出した者はお前の亭主だ、あの男が私の許嫁を奪つたん

だから！。——私は生れつき、自分で罰しない限り、人を赦す事が出来ないのだ——私は復讐する事を命令的な義務と考へて來た……今日でもさう考へてゐる！。

木乃伊 あなたは此所の家で何を探してゐるのです？。何をする氣です？。どうして此所へ這入つて來たのです？。——私の娘に懸り合があるのですか？。若しあの子に指でも觸つたら、あなたの命はありませんよ！。

老人 私はあの子の爲よかれと考へてゐる！。

木乃伊 然しあなたにはあの子のお父さんを痛はる義務があります！。

老人 それは出来ない！。

木乃伊 それならあなたは死ななくてはなりません、この部屋で、この屏風の蔭で……

老人 夫も已むを得ない……ただ私は、一旦噛みついた以上、それを放す事は出来ない……

木乃伊 あなたはあの子をあの子の學生と結婚させる氣でいらつしやる！。なぜです？。

あの學生は何でもないぢやありませんか、又一文なしぢやありませんか！。



老人 あゝの學生は金持になるのだ、私の力で！。

木乃伊 あなたは今夜招ばれていらつしやるんですか。

老人 いいや、然し私は、幽霊會に私を招ばせる様にしようと思つてゐる！。

木乃伊 誰が来るか御存知ですか。

老人 よくは知らない！

木乃伊 男爵が來ます……この上に住んでゐて、今日の午お葬ひのあつた人の婿にあ

たる……

老人 門番の神さんの娘と結婚する爲に、今の妻君と離別しようとしてゐる。……そ

れから昔お前の男だつた！。

木乃伊 それからあなたの昔の許嫁が來ます、私の主人が誘惑した……

老人 結構な集りだ……

木乃伊 ああ、私達に死ぬ事が許されたら！。死ぬ事が許されたら！。

老人 そんならどうしてお互に交際してゐるんだ？。

木乃伊 犯罪と祕密と罪の意識とが私達を繋ぎ合せてゐるからです！。私達は喧嘩を

しました、さうしてお互に別れ別れになりました、ほんとに數へ切れないほど幾度も――  
あとでは然し又私達は結び合はされるのです……

老人 大佐が來る様だ……

木乃伊 では私はアデーレの所へ這入ります……

(間)

木乃伊 ヤコブ、あなたのする事をよく考へて下さい！。あの人を痛はつておやりな

さい！。

(間)

(女去る。)

大佐 (來る、冷たく、隔てを置いて)。どうぞ、おかけ下さい！。

老人 (徐かにかける)。



(間)

大佐 (老人をしつと視る)。あなたがこの手紙をお書きになつた方ですか。

老人 ええ！。

大佐 フムメルさんですか。

老人 ええ！。

(間)

大佐 賣りに出された私の借用證書をあなたが一まとめにお買ひとりになつた事は承知しました、とすると、私はあなたの掌中にある譯です。どうすればよろしいのです？。

老人 消却して戴きたいのです、何等かの方法で。

大佐 どんな方法で？。

老人 極簡単な——金の事をいふのはよしませう——唯私が此家こちからのお客になる事を許して戴きたいのです！。

大佐 そんな事でよろしいのでしたら……

老人 ありがたう！。

大佐 それから？。

老人 ベングトソンを解雇して下さい！。

大佐 なぜ解雇しなくてはいけないのです？。あれは人一代の間も私に仕へて来た忠實な召使です——忠實に勤めたといふ廉で國家から記念章まで貰つてゐる。なぜ解雇しなくてはいけないのです？。

老人 さういふ一切の美點を持つてゐるのは、あなたの頭の中なかにあるあの男です！。あの男の見かけと實際とは違ひます！。

大佐 實際はあれはどんな人間です？。

老人 (たじろく)。あなたの言ふ事に間違はない！。——然しベングトソンには暇をお出下さい！。

大佐 あなたは私の家うちを支配する氣ですか。老人 さうです！。此所に見える一切のものは私の所有なんだから、家具も窓掛も食器もシャツの筒筒も……それからもつと外ほかのものも……大佐 もつと外ほかのものとは？。



老人 一切です！。眼に見える一切のものは私の所有です、私のものです！。

大佐 よろしい、あなたのものでよろしい！。然し貴族としての私の身分と疵のない私の名前とは、私のものとして残つてゐる！。

老人 いや、それさへもあなたのものぢやない！。(間) あなたは貴族ぢやありません！。

大佐 恥を知り給へ！。

老人 (一枚の書類を隠囊から取り出す)。紋章鑑から抽き書きをした是を讀んで御覽なさい、あなたが名乗つてお出での名前の家は、百年前に絶えてゐる！。

大佐 (讀む)。さういふ噂を聞かないぢやなかつた、然し私は父を嗣いでこの名前を名乗つてゐる。……(讀む)。まつたくだ、あなたの仰有る通りだ……私は貴族ぢやない！。——是さへも私のものぢやない！。——では私は私の印章入の指環をとつて了ひます。——仰有る通りです、是はあなたのものです。……どうぞ！。

老人 (指環を隠囊に入れる)。次へ移りませう！。——あなたは大佐でもないのです！。

大佐 私が大佐でない？。

老人 ええ！。あなたは元亞米利加の志願兵隊で大佐だつた、然しキューバの軍が濟み軍隊が編成換へになつてからは、それ以前の一切の稱號は引き上げられてゐるのです……

大佐 本當ですか。

老人 隠囊に手を入れる。書類をお目にかけますか。

大佐 いや、その必要はない！。……こんな風に私を裸にして行く権利を持つてゐるあなたは、何者です？。

老人 今に分ります！。然し裸にするといへば——あなたは何者だか、自分で御存知ですか。

大佐 恥を知り給へ、恥を。

老人 その髪をとつて鏡の前に立つて御覽なさい、それから齒もとり口髯も剃り——ベングトソンを呼んで鐵製の胸板の紐をとかして御覽なさい——さうしたら、召使の誰彼が是が自分の主人だと思ふかどうか——何所かの臺所にゐた居候が……

大佐 (卓上の呼鈴に手をかけようとする、老人は先にそれを押へる)。

老人 鈴に觸つちやいけません、ベングトソンを呼んぢやいけません、そんな事をす



るなら、私はあなたを拘引させる。……お客さんがもう見えるでせう——おとなしくしておいでなさい、さうすればお互に何喰はぬ顔をしてゐる事が出来ます！。

大佐 あなたは何者です？。眼つきと言葉の調子には覺えがある……

老人 穿鑿しないで置きなさい、黙つておいでなさい、唯私の言ふ事を聞いてみれば可いのです！。

學生 (来る、大佐の前でお辭儀をする)。大佐さん！。

大佐 君、よく來ました！。あの大慘事の際の君の高貴な振舞は君の名前をあらゆる

人の脣に上げせました、君を此所に迎へ得る事を、私は名譽だと思つてゐます……

學生 大佐さん、私の取るに足りない素性は……あなたの立派なお名前とあなたの貴

い御身分とは……

大佐 失禮ですが、大學生アルヘンホルツ君、支配人フムメル君。……君、君は婦人

連に挨拶でもして下さい、私は支配人さんと話をすませる必要があるから。

學生 (ヒアシンスの部屋にやられる、そこで令嬢とおど話ししてゐるのが、ず

うつと見えてゐる)。

大佐 立派な青年だ、音楽が出来、歌が唄へ、詩がかける……若しあれが貴族で身分の同じ人間だつたら、全然文句はないのだが……まつたく……

老人 文句といふと？。

大佐 私の娘を……

老人 あ、あなたの娘！。——それは兎に角どうしてあの子はあすこの部屋に計りゐるんです？。

大佐 あの子は、外出する以外、あのヒアシンスの部屋にゐなくてはゐられないのです！。あの子の性分なんです。……やあベアータ・フォン・ホルシュタインクローナさんが見えた……人好きのする女だ……救済會員で、身分相應の暮しをする丈の利息が這入つて來て……

老人 (獨で)。俺の許嫁だ！。

許嫁 (白髪、呆けてゐる様に見える)。



大佐 ソロイライン・フォン・ホルシュタインクローナ、支配人フムメル……

許嫁 (お辭儀をして、かける)。

貴族 (来る、勿體をつける様な様子、喪服、坐る)。

大佐 シャンシヨルグ男爵……

老人 (體を起さずに、傍白)。これはたしか寶石泥棒だつた筈だ。……(大佐に。)

木乃伊をお呼びなさい、さうするとすつかり揃ふ……

大佐 (ヒアシンスの部屋へ行く扉口で)。ポリー！

木乃伊 (来る)。クルルーレ！

大佐 若い連中も呼ぶんですか。

老人 いや、若い連中はいけない！。あれは許しておやりなさい……

(みんな黙つたまま輪を畫いてかける。)

大佐 茶を飲みませうか。

老人 何の必要があります？。誰も茶の好きなものはない、お互に體裁ぶるのはよしにしようぢやありませんか！。

大佐 ぢやお話しをしますか。

老人 天氣の事を話すのですか、お互に知つてゐるのに。この比はいかがですと訊くのですか、お互に知つてゐるのに。私は沈黙の方が可い、沈黙してゐれば腹の中が聞えます過去が見えます。言葉では隠せるが、沈黙ではなんにも隠せない！。近比讀んだものの中に、言葉の相違は實は野蠻人の間で他の種族に對して自分達の種族の祕密を隠す爲めに發生したものだ、と書いてあつた。即ち言葉は符徴です、従つて鍵をみつけた者には、世界中のあらゆる言葉が分る筈です！。といふ事は然し、鍵なしに祕密が洩らされる事もあるといふ事を妨げない、殊に父である事が證明されなければならぬ様な場合では！。もつとも法廷の證據は、是は別です。嘘の證人でも、二人が一致すれば、證據充分なんだから。然し私のいふ様な事件では、證人は入らないのです！。自然自身が既に人間の心の中に羞恥の感情を植ゑつけてゐる、是は隠されべき筈のものを隠さうと努める感情です。然



し我我は、その積もないのに、さういふ境遇に滑り込む事がある、すると、最も祕密にされてゐたものが暴かれ、詐欺師の假面が剥ぎとられ、悪黨が正體をあらはされる様な機会が時折は獨りでに出て来る……

(間。みんな黙つたまま互に顔を見合せる。)

老人 ひどくしんとしたものだな！

(長い沈黙。)

老人 此所に例へば、この尊重すべき家うちの中で、この美はしい家庭の中で、この、美と教養と富とが結びつけられてゐる……

(長い沈黙。)

老人 ここに坐つてゐる我我凡ては、お互に我我が何者であるかを知つてゐる……でせう？……私は夫を言ふ必要はない。……あなた方は私を知つてお出です、丸で知らない様な顔をしてゐるけれども。……さうして、向うのあの部屋には私の、私の娘が坐つてゐる、この事もあなた方は知つてゐる。……あの子は生活に對する興味を失つて了つた、何故といふ事は知らずに……然しあの子は、罪と偽とあらゆる種類の胡魔化しとが呼吸し

てゐる、この空氣の中で萎れたのです……だから私はあの子の爲に友達を一人探してやつた、そのそばにゐればあの子は、高貴な振舞から輝き出る、光と暖か味とを感じる事が出来るのです……

(長い沈黙。)

それがこの家うちに於ける私の任務だつたのです。雑草を根こぎにし、罪の正體をあらはし、總勘定をして置いて、若い者に、この家庭で、私が二人に贈る、新しい事を始めさせるのです。

(長い沈黙。)

是で御自由にお引取を願ふ事にします、御順に。残つておいでの方は、拘引させます！。長い沈黙。)

お聞きなさい、時計が、丁度壁にかけた死の時計の様に、チクチクと云つてゐる。何と云つてゐますか。「時！ 時！」と云つてゐる。時計はもう少して時を打つ、するとあなた方の時刻が来る、あなた方は退席しなくてはなりません、然し夫より早くてもいけない。然し時計は、打つ前に、威嚇する！。そら！。いま時計は宣言してゐる、時計は打つぞ！



と。——私も打つぞ!。(松葉杖で卓上を打つ。) わかりましたか。(沈黙。)

**木乃伊** (置時計の傍に寄つて、それを止めて了ふ、そのあとで明瞭に又嚴かに)。然し私は時の動きを喰ひとめる事が出来ます——私は過去を無に、起つた事を起らなかつた様にする事が出来ます!。然し賄賂の力でも脅喝の力でもなく、悩みと悔いとの力で!

(老人の傍へ寄る。)

私達は憫れな人間です、それは私達に分つてゐます。私達は道に戻つた事をしました、私達は過を犯しました、凡ての人と同じ様に!。私達は、私達がさう見えてゐる様なものでもありません、私達は底の底では私達自身よりもつと良いものなのだから、私達は私達の罪を決して可い事だとは思つてゐないのだから。然し、ヤコブ・フムメル、あなたが名前を騙つて人を審くといふ事は、あなたが、私達憫れなものよりもつといけない人間であるといふ事の證據です!。あなたもやつぱり、さう見えてゐるのは、違つてゐる方です。あなたは人間泥棒です、あなたは昔嘘を匂はして私を盗みました。あなたは今日お葬ひのあつた領事を殺して了つた、あなたは借用證書をつかつてあの人を締め殺したので、あなたは又あの學生を盗みました、あなたに嘗て一文も借りた事もないあの方のお父

さんに金を貸したなどと嘘をついて……

**老人** (立ち上がつて口を出さうとする、が、椅子に倒れかかる、さうして崩折れる以下段段ひどく崩折れて行く)。

**木乃伊** あなたの生涯には黒點がある、夫は私にははつきり分らないけれども、然し見當はついてゐます。……ベングトソンが屹度それを知つてゐる!。(卓上の呼鈴を鳴らす)

**老人** いけない!。ベングトソンはいけない!。あれはいけない!。

**木乃伊** やつぱり、あの男が知つてゐる!。(再び鈴を鳴らす。)

(小さな牛乳配達の娘が廊下への扉口に現はれる、老人以外の誰にも見えない、老人は愕驚する。ベングトソンが這入つて來ると、娘は消えて了ふ。)

**木乃伊** ベングトソン、お前此方を知つてゐるか。

**ベングトソン** ええ、此方でも向うを知つてゐるし、向うでも此方を知つてゐるのです!。誰も言ふ通り、轉變の世の中です、私はそいつに使はれてゐた事がある、そいつも私に使はれてゐた事がある。そいつは丸二年うちの臺所で居候をしてゐたのです——そい



つが三時に出て行くので、二時には食事の用意が出来た——家の者は始終<sup>ゆめ</sup>温め直しを喰はされた——そこにゐるその牛の喰つたあとを。ところがそいつは、ブイヨンまで飲んで了つた、あとは水を割つて飲まなくてはならなかつた——そいつは丸で吸血鬼<sup>フムビユール</sup>か何かの様に、うちの者の精分をみんな吸ひとつたのです、そのため私達は殆んど骸骨になつて了つた。それ計りぢやない、そいつは、私達が料理番の女を泥棒だと云つたといふので、あぶなく私達を牢に入れる所でした！。——その後私はそいつにハムブルクで會つた事がある、そいつは名前を變へて、何でも高利貸か何か因業な商賣をしてゐました——その上、自分の犯罪を見てゐたといふので、發覺を恐れて、ある娘を氷の上に誘つて殺さうとしたとかで、告訴された事もあります……

木乃伊 (手で老人の顔を撫で下す)。これがあなたなのです！。さあ、證文や遺言狀を出してお了ひなさい！。

ヨハンソン (廊下への扉口に現はれこの場面を非常な興味を持つて眺めてゐる、今は彼は奴僕の境地から解放されようとしてゐるのだから)。

老人 (隱囊から一束の書類を取り出し夫を卓上に投げ出す)。

木乃伊 (老人の脊中を撫で下す)。ガイガイさん！。ヤコブはゐますか。

老人 (鸚鵡の様に)。ヤコブはゐるよ。——カカドラ！。ドラ！。

木乃伊 時計は打つてよござんすか。

老人 (グルグルといふ様な聲を出す)。打つてもよろしい！。(鳩の時計の眞似をする) クックク、クックク、クックク……

木乃伊 (押入の壁紙貼りの扉をあける)。さあ時計が打ちました！。立ちあがつて、押入の中にお這入んなさい、私が二十年住んで私達の罪を泣いた所です……中に繩が一筋あります、それは、あなたが上の領事を締め殺し、又あなたの恩人を締め殺さうとした、その繩を思ひ出させる爲のものです……お這入んなさい！。

老人 (押入の中に這入る)。

木乃伊 (扉を閉める)。ベングトソン！。屏風をお立て！。死<sup>しに</sup>屏風を！。

ベングトソン (扉の前に屏風を立てる)。

木乃伊 是ですつかり型がつかまりました！。——あの人の魂にお恵が下ります様に！。皆 アーメン！。



(長い沈黙。)

(ピアシンスの部屋では、令嬢が<sup>ハープ</sup>豎琴で學生の歌に伴奏してゐるのが見える。)

(前奏ある歌。)

われ太陽を見たるときわが心

知れざる者を見たりと思へり、

人皆神の業を享<sup>ち</sup>樂く、

善をなすものぞ幸深き。

激して犯せるわが罪を

悪もて償ふ事勿れ、

虐げたる者を

慈愛もて慰めよ

さらば汝に酬いあらん。

怖るるは、罪あるもののみぞ

罪なくて生きんこそ善き事なれ。

幽 靈 曲

第三(最後)幕



東洋風のモチヅを使つた、稍怪奇な様式の部屋。あらゆる色のヒアシンスが到る所にある。マジョリカの煖爐の上には、大きな佛陀が置いてある、佛陀の膝に環根がある。そこからシヤロット (*Allium ascalonicum*) の莖が伸びて出て、白い星の様な花をつけた鞠形の臺を支へてゐる。

右手の背景には圓形のサロンに通ずる扉がある、サロンには大佐と木乃伊とが手持無沙汰さうにじつと坐つてゐるのが見える、死屏風の一部も見える、左手には、食堂と臺所とへ通ずる扉がある。

學生と令嬢 (アデーレ) とが卓子のそばにゐる、令嬢は堅琴<sup>ハルモニウム</sup>を持ち、學生は立つてゐる。

令嬢 私の花の爲に唄つてやつて下さい！。

學生 是はあなたの魂の花ですか。

令嬢 是は私の唯一のものです！。あなたはヒアシンス好きですか。



學生 私はどの花にもましてヒアシンスを愛します。水の上に首を出しその白い純な細根ほそねを無色の液體の中に下ろしてゐる環根から、すらりとまつ直に伸び出た、あの處女らしい姿を、私は愛します。また私はあの色を愛します、邪氣のない純な雪白の色、愛らしい蜜色、若若しい淡紅色、成熟した紅色、然しどれにもまして空色の、露の滴る空色の、深い眼の色、まごとの色……。私はすべてのヒアシンスの花を、黄金こがねにも眞珠にもまして愛します。私は子供の時分から、この花を愛して來ました、讚嘆して來ました、この花は私の持つてゐない凡ての美しい性質を持つてゐるのです……。然し……

令嬢 然し？

學生 私の愛は應へられないのです、この美しい花は私を憎んでゐるのです……

令嬢 どうして？

學生 雪解の上を互つて來た初春の風に吹かれる、濃厚な又純粹な、あの花の匂ひが、私の官能を混亂させ、私を昏迷させ、私を眩惑させ、私を部屋の外へ驅り立て、毒矢で私を射り、私の胸に痛みを與へ私の頭を熱くするのです！。あなたはこの花の祕密を知つていらつしやいますか。



令嬢 話してきかせて下さい！

學生 それより先にその意味の方を話させよう！。水に浮いてゐる若くは土の中にある環根は地です、莖は地軸の様に眞つ直に伸びます、その頂上に六條の線を放射する星の花が咲くのです……

令嬢 大地の上に星！。ああ、素敵！。あなたは何所からそんな事をお思ひつきになつたの。どうしてそんな事にお氣が付きになつたの。

學生 さあ、どうしてでせう！。——あなたの眼を見てです！。——この花はだから宇宙の縮圖です。……それだからこそ佛陀は大地なる環根を手を持つて坐つてゐるのです、さうして、それが高く伸びて天に化なるのを見る爲に、自分の眼でそれを睇たいてゐるのです。……憫れな地が天に化なる！。それを佛陀は待つてゐるのです！。

令嬢 あ分かりました——待雪草の花も百合と——ヒアシンスと同じ様に六瓣なのぢやありませんか。

學生 その通りです！。すると待雪草の花は隕ちて行く星です……

令嬢 すると待雪草は雪シユネーシユテルン星スターです……雪から生れた！。



學生 それよりも、大空の星のうちで一番大きな一番美しい、黄色と紅との、シリウス星です。シリウスが黄色と紅との花柄と六本の白光とを持った水仙です……

令嬢 あなたはシャロットの花を御覧になつた事がありますか。

學生 ありますとも！。シャロットは丸い鞠の、球の中に花を咲かせる、それは丁度燦めく星を撒きちらした穹窿の様な花です……

令嬢 ええ、ほんとに素敵ね！。それは一體どなたのお考へ？。

學生 あなたのです！。

令嬢 あなたのです！。

學生 私達のです！。——私達は合作したのです、私達は結婚してゐるのです……

令嬢 まだ……

學生 あとにまだ何があります？。

令嬢 待つ事、試ためされる事、耐へ忍ぶ事！。

學生 よろしい！。私をお試しなさい！。

(間。)

學生 ねえ、どうしてお父さんやお母さんは、一言も口を利かないで、あすこにあんなにじつとしていらつしやるんです？。

令嬢 お互にお互のいふ事を信じないから、言ふ事がないのです。父はさう言つた事があります、お互に騙し合ふ事が出来ないのに、何の必要があつて話しをするのかと。

學生 ぞつとする様な話です……

令嬢 あ、料理番が来ました……御覽なさい、あんなに大きくあんなに肥つて……

學生 何しに来るのです？。

令嬢 食事の事を訊きに來るのです。母の病中は私が家事をやつてゐます。

學生 我々と臺所と何の関係もないぢやありませんか。

令嬢 でも食べなくてはなりません……あの女を見て御覽なさい、私にはあの女が見られない……

見られない……

學生 あの女は何者です？。

令嬢 あの吸血鬼フムビルフムメルフムビルの一族です、あの女は私達を喰つて了ひます……

學生 なぜ解雇なされないのです？。



令嬢 出て行かないのです！。私達はあの女に對して何等の權力も持つてゐないので、私達は私達の罪の爲にあの女を脊負されたのです。……あなたにはお分かりになりませんか、私達は今になつて了ひます喰ひ悉されて了ひます……

學生 ぢや喰ふ物を喰はせないのですか。

令嬢 いえ、皿數は持つて來ます、然し精分はみんななくなつてゐるのです。……あの女は肉を煮くたらかします、自分ではブイヨンと思ふさま飲んで、私達には纖維と水とを呉れます、焼肉をしても、あの女はまづエキスを煮出します、それをソースに入れて、汁を吸つて了ひます、あの女の觸はるものは、みんな精分をなくして了ふのです。あの女は眼で精分を吸ひとる様な氣がします、あの女は珈琲を飲んで、私達はその滓を飲みます、あの女は瓶詰の葡萄酒を飲んで了つて、瓶には水を詰めて置きます……

學生 追つ拂つて了ひなさい！。

令嬢 私達には出來ません！。

學生 なぜ出來ません？。

令嬢 なぜだか分らないのです！。あの女は出て行かないのです！。誰もあの女に對

して力を持つてゐないので——あの女は私達から力を奪ひとつて了ひました！。

學生 私が追つ拂つてよござんすか。

令嬢 いけません！。今迄どほりにして置かないと、屹度いけないに違ひないので、——今にあの女は此所に來ます！。さうして、お午には何を召しあがります、と訊きます、何と何と何と、私が返事をする、あの女は色色反對します、さうして結局あの女の思ひ通りになります。

學生 ぢやあの女に自分できめさせたら可いぢやありませんか。

令嬢 それは當人が不承知なのです。

學生 まつたく妙な家うちですね！。憑つきものでもしてゐる様な！。

令嬢 さうです！。——あ、あなたの姿を見たら、引き返して行きます！。

料理番の女 (扉口で)。いや、さうぢやない！。(齒の見える様にやりとする。)

學生 行つちまへ、婆あ！。



料理番の女 気が向いたら！。(間。) さあ気が向いた！。(消える。)

令嬢 怒つちやいけません！——我慢の稽古をして下さい！。これも、私達がこの家で受ける筈になつてゐる、試練の一つです！。外にもまだ、私達が負けてゐなくてはならない、女中が一人ゐます！。

學生 ああ倒れさうだ！。氣をとりなほせ！。起て、心！。歌だ歌だ！。

令嬢 待つて下さい！。

學生 歌だ歌だ！。

令嬢 我慢して下さい！。——此所は試練の部屋といふ部屋です——見た所は綺麗で、然も其實何もかも満足なものはないのです……

學生 そんな事が。もしあるにしろ氣にすべき事ぢやない！。この部屋は綺麗ですよ、ただ少し寒い！。なぜ火を焚かないのです？。

令嬢 焚くと煙いぶるから。

學生 煙突の掃除をさせるが可いぢやありませんか。

令嬢 させても駄目です！。……あすここにデスクが見えるでせう？。

學生 大變綺麗です！。

令嬢 ところがぐらぐらしてゐます！。私はコルクを薄く切つて毎日その脚の下に挿し込みます、然し女中が、掃除をしては、それを除つて了ふのです、それで私は毎日毎日新しくコルクを切らされるのです。ペン軸には毎朝インキがくつついてゐます、ペンも同様です、さういふものを私は、毎朝、日が上がると、洗はなくてはならないのです、女中の使つたあとを。(間)。あなたの一番嫌ひな事はなんですか。

學生 洗濯物の勘定です！。ふう！。

令嬢 それは私の仕事です！。ふう！。

學生 それから？。

令嬢 夜おちおち眠らされないのです、女中が忘れるので、自分で起き上がつて窓の上の鍵を鍵穴にさし込んだりしなくてはならないのです。

學生 それから？。



令嬢 梯子を使つて、女中のひきちぎつた、煖爐の口の紐を直します。

學生 それから？

令嬢 女中のあとで掃除をします、女中のあとで雑巾がけをします、女中のあとで煖爐に火を焚きつけます、女中は唯薪を投り込んで置く計りなんです！。煖爐の口に氣をつけたり、ガラスを拭巾で拭いたり、食卓の後片づけをしたり、瓶の栓をぬいたり、窓をあけて風を通したり、自分の寢床をもう一度作り直したり、水指に苔が生えて緑色になつてゐる時にはそれを濯いだり、いつも切らして計りある燐寸だの石鹼だのを買い調べたり、ランプの油煙が上がらない様には、やを拭いたり心を切つたり。又お客さんのある時には、ランプが消えない様に、私は、自分で油を注がなくてはならないのです……

學生 歌だ歌だ！

令嬢

待つて下さい！。——その前に骨を折るのです仕事をするのです。身にくつつ

いてゐる人生の不純なものを洗ひ落す爲の、骨折仕事をするのです。

學生

しかしあなたは金持ちやありませんか、二人も召使を置いてゐて！。そんなものが何になります！。たとひ三人使つてゐたところで！。生きるとい

令嬢

ふ事は骨の折れる事です、私はよく疲れて了ひます。——なほその上に子供部屋の事を考へて見て下さい！。

學生

あらゆる歡びのうちの最も大きな歡びです……

令嬢

最も價あたいの高い……人生はそれほどまで骨を折る値うちのあるものなのでせうか？。

學生

それは、その骨折によつて期待する、報酬次第だらうと思ひます……私は、あなたの手をとる事が出来れば、どんなものにもたじろかない覺悟を持つてゐます……

令嬢

そんな事を言はないで下さい！。——あなたは決して私を手に入れる事は出来ないのです！。

學生

どうしてです？。

令嬢

それをお訊きになつてはいけません！。

(間。)

學生

あなたは腕環を窓からおつことしました……

令嬢

私の腕が細くなつて了つたから……



料理番の女 (日本の醤油の瓶を手にして現はれる)。

令嬢 ああ！。あすこに、私や私達凡てのものを喰つて了ふ、女がやつて來ました。

學生 手に持つてゐるのは何です？。

令嬢 あれは蝸まごりの様な文字のかいてある、調合薬の瓶です、悪魔の調劑です。ソーヤといふ名前の妖婆です、水をブイヨンに變へ、喰ひ悉されたソースの代りになり、燕を煮て泥龜すっぽんのスープを拵へるのです。

學生 出て行け！。

料理番の女 あなた方は私達の精分を吸ひとる、その代り私達はあなた方の精分を吸ひとる。私達は血をとつて、あなた方には水を返して上げます——調合薬で色をつけて。是がその調合薬です！。——もう私は行きます、然し、私は、ゐたいとさへ思へば、いつまでもゐるのですよ！。(去る。)

(間。)

學生 ベングトソンはどうしてメダルを持つてゐるのですか。

令嬢 立派な功績があつたからです。

學生 少しも缺點のない男ですか。

令嬢 そりや、非常な缺點もあります、然しそれでメダルを貰ふものぢやありません。(微笑する。)

學生 此所のうちにはいろんな祕密がある……

令嬢 外の家うちと同じ様に——私達の祕密は私達に委せて置いて下さい！。

(間。)

學生 あなたは正直といふ事は好きですか。

令嬢 多少は！。

學生 私は時時、自分の考へてゐる一切合切をぶちまけて了ひたい、氣狂じみた要求に襲はれる事がある。然し、若し人間が本當に正直だつたら、世界は屹度崩れて了ふ、といふ事を私は知つてゐます……



(間。)

學生 私は此間ある教會のお葬ひに行きました——非常に嚴肅な又見事なお葬ひでした……

令嬢 支配人フムメルさんのお葬ひでせう。

學生 ええ、私の恩人の！——棺の頭の所に、死んだ人の年長の友人が立つてゐました、その人がお葬ひの指揮をしました。坊さんが、その尤もらしい態度とその楚楚とした言葉とで、私に特に印象を與へました！——私は泣きました、みんなも泣きました。——そのあとで私達は料理屋へ行きました。……其所で私はその日の指揮者が死んだ人の息子を愛してゐたのだといふ事を聴きました……

令嬢 (言葉の意味を探ぐる爲に、彼の顔をじつと見る。)

學生 それから、死んだ人は自分の息子の念者から金を借りたのだといふ事も……

(間。)

學生 その翌日坊さんは、教會の金をくすねたといふので、拘引されました！。まったく結構な事です！。

令嬢 ふう！。

(間。)

學生 私が今あなたの事をどう考へてゐるか、分りますか。

令嬢 それは言はないで下さい、さうでないと私は死にます！。

學生 言はない譯に行きません、言はなければ私が死にます！。

令嬢 病院でこそ人は自分の考へてゐる事を何もかもいふのです……

學生 そこです！。——父は精神病院で死にました……

令嬢 御病氣だつたんですか。

學生 いや、健康だつたのです、然し氣が狂つてゐたのです！。ある時それが爆發しました、然もかういふ場合に……父は我我凡ての者と同じ様にある交際圈に取り巻かれてゐました、それを父は便宜上友人圏と呼んでゐました、是は勿論、最も多くの人間がさうである様な、慘めな人人の群れから成立つてゐました。然し父は一人ぼつちで生活する事は出来なかつたのだから、兎も角も或程度の交際をする必要があつたのです。それで、世の中では、他人に對して、自分がその人達をどう考へてゐるかといふ事は言はない、普通



は少くとも言はない事になつてゐるのだから、父も同様に夫は言はなかつたのです。父は、人人がどんなに嘘つきであるかをよく知つてゐました、その無誠意も底の底から心得てゐました：然し父は賢明でもあれば教養もあつたから、父はいつでも丁寧<sup>ていねい</sup>に振舞つてゐました。ところが、ある日父は大勢<sup>おほぜい</sup>お客をしました。晩の事です。父はその日の晝間の仕事に疲れ、又、或は黙つてゐなければならなかつたり、或は客と愚にもつかない事を饒舌<sup>じょうぜつ</sup>しなければならなかつたり、さういふ骨折に疲れて了つて：

令嬢 (ぎよつとする)。

學生 最後に彼は卓をこつこつと叩いて皆を沈黙させ、自分のグラスを攫んで、演説を始めたのです。：その時留め金は外されました、さうして縷縷と説いて父は、片つぱしから、お客の全部を素つ裸にして了ひました。彼等に對して彼等の誤魔化しの皮をすつかり剥いで了ひました。それからぐつたりして卓のまん中に坐り、お客さん達に行きたい所へ勝手に行けと言ひました！。

令嬢 ふう！。

學生 私はその席にゐました、さうして私は、そのあとで起つた事を、一生忘れる事

が出来ないので！。：父と母とが殴り合ひを始めました、客は扉口を指して飛び出しました：さうして父は、父の死んだ、精神病院に入れられたのです！。

(間。)

學生 あんまり長い間黙つてゐると、溜り水が出来る、溜り水は腐敗する、この家は丁度それです。ここにはそれ以外にも腐敗したものがあつた！。然も私は、初めてあなたがここに這入つていらつしやる所を見た時には、ここを、パラダイスだと思つたのです。：私はある日曜の午前にこの外に立つてこの家の内を覗き込みました。私は、實は大佐でも何んでもない、大佐を見ました。私は、實は強盗で自ら縊死しなければならなかつた様な、高貴な恩人を見ました。私は、實は木乃伊でも何んでもない、木乃伊を見ました、それから處女を、生れつきか夫とも境遇のせむか：。それは兎も角、處女らしさといふものは何所にある？。私はそれを解剖博物館で九十倍の酒精<sup>アルコール</sup>に浸かつてゐるのを見たきりだ。美しさといふものは何所にある？。自然の中にそれから私の心が日曜の晴著を著てゐるときに私の心の中に！。誠と信仰とは何所にある？。お嘸の中と子供の頭の中に！。ものもの、未來を約束するもの、さういふものは何所にある？。私の空想の中に！。



あなたの花は今私を毒しました、その代り私はあなたを毒しました。……私はあなたに家庭を作つて妻になつて下さいと頼みました。私達は詩を作り、歌を唄ひ、樂器を奏しました——そこへ料理番が這入つて來ました。起て、心、だ！。その黄金色の堅琴からもう一度燄と紅みとを弾き出して見て下さい……やつて見て下さい、お願いです、膝を折つて私は命令する。……よろしい、ぢや自分でやります！。

(堅琴をとりあげる、然し絃は音を出さない。)

琴は啞になつて了つた！。ああ、一番美しい花にこんな毒があるとは、一番毒があるとは。呪ひは創造全體の上に人生全體の上にかかつてゐるのだ。……どうしてあなたは私の花嫁になつて呉れないのです？。あなたは生命の源に病を持つてゐるからです。……今私は、臺所のあの吸血鬼ワ、ピエ、イ、ンが私を吸ひとり始めた事を、感じる。是はきつと、あの、子供の血を吸ふ、ラミヤに違ひない——寢室でなければ、きまつて臺所で家の子供は心臓に穴をあけられてゐる……

視力を弱める毒がある、視力を強める毒もある——私はきつと第二の毒を受けて生れて來た、私は醜いものを美しいと見、惡を善と呼ぶ事が出來ないのだから——私には出來な

いのです！。イエス・キリストは地獄へ降りて行つた、この世でキリストの漂泊の道筋は精神病院を通り、牢屋を通り、死骸室を通つて地の底へ行く事だつた——然も馬鹿者どもは、キリストが自分達を解放して呉れようとした時に、キリストを殺して了つた。然し泥棒は放免された、泥棒にはいつでも同情が集まるのだ！。ああ！。ああ！。我我凡ての間は慘めだ！。救世主、私達を救つて下さい、私達は死ぬ！

令嬢 (崩折れて、死んだ様になつてゐる、鈴を鳴らす)。

ベングトソン (來る)。

令嬢 屏風を！。早く——私は死ぬ！。

ベングトソン (屏風を持つて來て、それをあけて、令嬢を圍ふ)。

學生 救ひ主がやつて來た！。蒼白い眠よ、よく來てくれた。美しい、不幸な、罪なき、罪なくして惱める者よ、夢なしに眠れ、さうして今度眼を覺したら……お前を、焚きつかない太陽が、塵のない家庭で、お前を迎へてくれる様に……汚點のない身内のものが、缺陷のない愛が、お前を迎へてくれる様に……賢明柔和の佛陀よ、おん身はそこに坐つて、天が地から生ひ出でるのを待つてゐる、どうか試鍊に耐へ通す力を、意志の純粹を、私達



に授けてくれ、希望が汚辱にならない爲に！。

(豎琴の絃がさらさらと鳴る、部屋は白い光で一杯になる。)

われ太陽を見たるときわが心

知れざる者を視たりと思へり、

人皆神の業を享樂く、

善をなすものぞ幸深き。

激して犯せるわが罪を

悪もて償ふ事勿れ、

虐げたる者を

慈愛もて慰めよ

さらば汝に酬いあらん。

怖るるは、罪ある者のみぞ

罪なくて生きんこそ善き事なれ。

(屏風の陰で呻き聲が聞える。)

汝憫れむべき小さき子よ、偽と罪と悩みと死との此世の子よ、流轉と失望と苦痛との此世の子よ。天なる主の恵の汝の道に下れかし

(部屋が消える、ペクリンの『死の島』が背景になる。)

「かくて神かれらの目の涙を悉く拭ひとり、復死あらず哀み哭き痛みあることなし、そは前の事既に過ぎ去りたればなり。」

(微かな、快く悲しい音楽が、死の島から聞えて来る。)



岩波文庫  
222

昭和二年十一月三十日印刷  
昭和二年十二月五日發行



發行所

東京市神田區  
南神保町十六番地

岩波書店

電話九段二一〇九番  
振替東京二六二四〇番

譯者

小宮豐隆

發行者

東京市神田區南神保町十六番地  
岩波茂雄

印刷者

東京市牛込區市ヶ谷加賀町二丁目  
菊地眞次郎

幽靈曲★

定價二十錢

株式會社秀英印刷



## 讀書子に寄す

岩波茂雄

岩波文庫發刊に際して

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫はこの要求に應じそれに勵まされて生れた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に限なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。其廣告宣傳の狂態は姑く措くも、後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繫縛して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の良途なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものがある。この秋にあたつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針

の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に互つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價值ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる土の自ら進んでこの擧に参加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒としてその達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

昭和二年七月



岩波文庫

□此文庫は、普及を第一義として刊行する廉價版です。  
 □内容の厳選 古今東西のあらゆる古典及び、價値高き良書を網羅し、校訂、翻譯に於ても最善を期します。  
 □最低の廉價 出来る丈安く手に入れられる様に、小さい形の中に、澤山の内容を盛る形式を採りました。  
 □購求の自由 しかも讀者が全く自由に、欲しい本を随時求められる自由選擇の方法を執りました。  
 □方法は、範を廣く内外に見めたる結果、最合理的普及版たる獨のレクラムに則りました。  
 □約百頁を單位として星一つを以てそ

れを現はし、★一つ毎に二十錢の定價です。  
 □★一つを1に數へて此の文庫の番號を進めてゆきます。  
 □番號はたゞ發行順に従つて之を追ふものであります。  
 □★或は★★★★★は、夫々二百頁或は五百頁の本一冊なる事を示し、百頁づゝの分冊ではありません。  
 □裝幀は平福百穂畫伯を煩はしました  
 □送料(及定價)は左表の通りです。  
 定價二十錢送料二錢  
 ★ 四十錢 四錢  
 ★★ 六十錢 四錢  
 ★★★ 八十錢 六錢  
 ★★★★ 一円 六錢  
 ★★★★★ 一円 六錢  
 □御注文は前金で御願ひ致します。

- 1-4 新萬葉集上卷 佐佐木信綱編 ★★★
- 5-7 新萬葉集下卷 佐佐木信綱編 ★★★
- 8-9 こゝろ 夏目漱石著 ★★
- 10 フラソクラテスの辯明 久保 勲譯 ★
- 11-12 カン 實踐理性批判 波多野 精一譯 ★★
- 13 古事記 幸田成友校訂 ★
- 14-15 藤村詩抄 島崎藤村自選 ★★
- 16-20 スミス 國富論上卷 氣賀 勲重譯 ★★
- 21-31 スミス 國富論中卷 續刊 (未刊)
- 32 たけくりに 樋口一葉著 ★

- 33 國性論合 近松門左衛門作 ★
- 34-38 戦争と平和第一卷 トルス トイ作 ★★
- 39-41 戦争と平和第二卷 トルス トイ作 ★★
- 42-44 戦争と平和第三卷 トルス トイ作 ★★
- 45-55 戦争と平和第四卷 續刊 (未刊)
- 56-58 芭蕉七部集 伊藤松宇校訂 ★★
- 59 五重塔 幸田 露伴著 ★
- 60-61 病床六尺 正岡 子規著 ★★
- 62 父 ストリントベルク作 小宮 豊隆譯 ★
- 63-64 出家とその弟子 倉田 百三著 ★★



65	櫻の園	チエーホフ作 米川正夫譯	★
63-67	幸福者	武者小路實篤著	★★★
63	號外	他六篇 國木田獨步著	★
63-70	科學の價值	ポアンカレ著 田邊元譯	★★★
71-73	認識の對象	リツケルト著 山内得立譯	★★★
74	おら春	春一茶著 集萩原井泉水校訂	★
75-73	北村透谷集	島崎藤村編	★★★
77-78	賢者ナータン	レツツシン著 大庭米治郎譯	★★★
70	春の目ざめ	ヴエデキント著 野上豊一郎譯	★
80	令嬢ユリエ	ストリントベルク著 茅野蕭々譯	★

81	會我會	山近松門左衛門作 島和田萬吉校訂	★
82	闇の力	トルストイ作 米川正夫譯	★
83-84	仰臥漫錄	正岡子規著	★★★
85-87	科學と方法	ポアンカレ著 吉田洋一譯	★★★
88	伯父ワーニヤ	チエーホフ作 米川正夫譯	★
89	生ける屍	トルストイ作 米川正夫譯	★
90	賃労働と資本	マルクス著 河上肇譯	★
91-92	チャールズ・ダーウキン	ダーウキン著 小泉丹譯	★★★
93	俗樂旋律考	上原六四郎著	★
94	好色一代男	西田萬吉校訂	★

95	一流	佛幸田、露伴著	★
96-17	フロレゴメナ	桑木巖翼著 天野貞祐譯	★★★
98-99	上田敏詩抄	茅野蕭々編	★★★
100	奥の細道	その他 伊藤松字校訂	★
101	うたかたの記	他三篇 森鷗外著	★
102-103	綱島梁川集	安倍能成編	★★★
104-105	小公子	パアネット著 若松暎子譯	★★★
106-109	希臘羅馬神話	バルフィン著 野上彌生子譯	★★★
110	好色五人女	西田萬吉校訂	★
111-113	ゲエテとの對話抄	エツケルマン著 龜尾英四郎譯	★★★

114	千曲川のスケッチ	島崎藤村著	★
115	プロタゴラス 菊池憲一郎譯		★
116	愛と死との戯れ	ロマン・ロラン著 片山敏彦譯	★
117	布施太子の入山	倉田百三著	★
118	埋木	水沫集より 森鷗外譯	★
119-120	オネーギン	プーシユキン著 米川正夫譯	★★★
121	好色一代女	西田萬吉校訂	★
122-125	ギルヘルム・マイスター	(上)ゲルハルト・ハークス著 林久男譯	★★★
123-128	ギルヘルム・マイスター	(下) 續刊	(未刊)
129-130	民約	論 平林初之輔著	★★★



131 マルクス資本論(一) 宮川上 實譯★  
 132 マルクス資本論(二) 宮川上 實譯★  
 133 マルクス資本論續刊 (未刊)  
 169 古今和歌集尾上八郎校訂★★★  
 171 花傳 書野世阿彌校訂★  
 172-174 スピノザ哲學體系 小尾 節治譯★★★  
 175-176 蕪村七部集 伊藤 松字校訂★★★  
 177-180 法の精神 上卷 宮澤 俊義譯★★★  
 181-184 法の精神 中卷 (近刊)  
 185-188 カラマーゾフの兄弟(一) ドストエーフスキー作 米川 正夫譯★★★

189-191 カラマーゾフの兄弟(二) ドストエーフスキー作 米川 正夫譯★★★  
 192-199 カラマーゾフの兄弟(四) (近刊)  
 200 日本書紀 上卷 黑板 勝美編★  
 201-209 日本書紀 中卷 (近刊)  
 210-211 若いエルテルの悩み ゲヨ エテド 茅野 蕭々譯★★★  
 212 勞賃價格と利潤 マルクス著 河上 肇譯★  
 213 日本永代藏 和田 萬吉校訂★  
 214 稻 妻 小宮 豊隆譯★  
 215 青銅の基督 長與 善郎著★  
 216-217 水の上 モウパッサン作 吉江 喬松譯★★★

218-219 經濟要錄 佐藤 信淵著 龍本 誠一校訂★★★  
 220-221 和解・或る男其姉の死 志賀 直哉著★★★  
 222 幽靈 曲 小宮 豊隆譯★  
 223-224 墨汁一滴 正岡 子規著★★★  
 225-226 恐ろしき媒 永田 寛定譯★★★  
 227 作り上げた利害 永田 寛定譯★  
 228 子守唄 永田 寛定譯★  
 229 人間萬歳 武者小路實篤著★  
 230-231 ラスキナ藝術經濟論 西本 正美譯★★★  
 232 世間胸算用 和田 萬吉校訂★

233 自然認識の限界 デュボアレーモン著 宇宙の七つの謎 坂口 徳男譯★  
 234 陸奥直次郎 長與 善郎著★  
 235-237 福澤選集 福澤 諭吉著★★★  
 238 二人女房 尾崎 紅葉著★  
 續刊書目  
 カント純粹理性批判 上卷 天野 貞祐譯  
 シュライエル 宗 教 論 石原 謙譯  
 マンデルブロー 哲學とは何か 河東 涓譯  
 パンデルイ マヌエル カン 人 形而上學序論 平林 初之輔譯  
 ベルグソン 著 形而上學序論 錦田 義富譯



ニエこの人を見よ	安倍能成譯
パ ン セ	巴斯カル著 落合太郎譯
エ ツ セ	モンテニエ著 落合太郎譯
將來の哲學の根本命題	ホイエルバツハ著 植村晋六譯
哲學改革への提言	ホイエルバツハ著 植村晋六譯
勞働者綱領	ラツサール著 小泉信三譯
經濟原論	リカルド著 小泉信三譯
現代論	ロドベルクス著 山口正吾譯
マルクス エンゲルス ドイツチエ・イデオロギー	三木清譯
ハ ー エ ミ ー ル	平林初之輔譯
ベール婦人論	牧山正彦譯
世界の生成	アレニウス著 寺田寅彦譯
種の起原	ダーウキン著 小泉丹譯
雜種動植物の遺傳	メンデル著 小泉丹譯
生命の不可思議	ヘツケル著 後藤格次譯
相互扶助論	クロボトキン著 近三四二郎譯
神皇正統記	星野日子四郎校訂
源氏物語	紫式部著 鳥津久基校訂
平家物語	語
伊勢物語	語
參考	屋代弘賢校訂

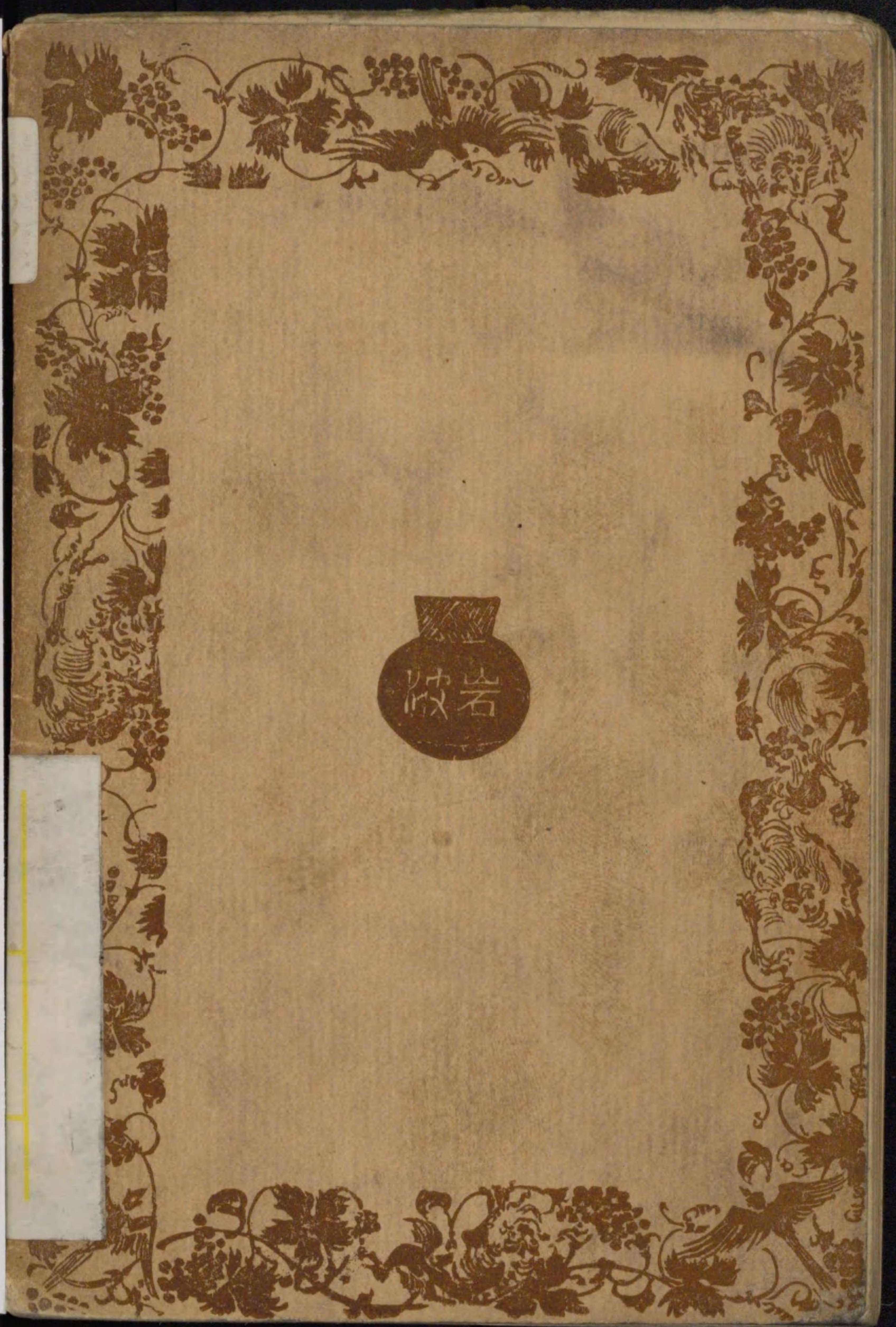
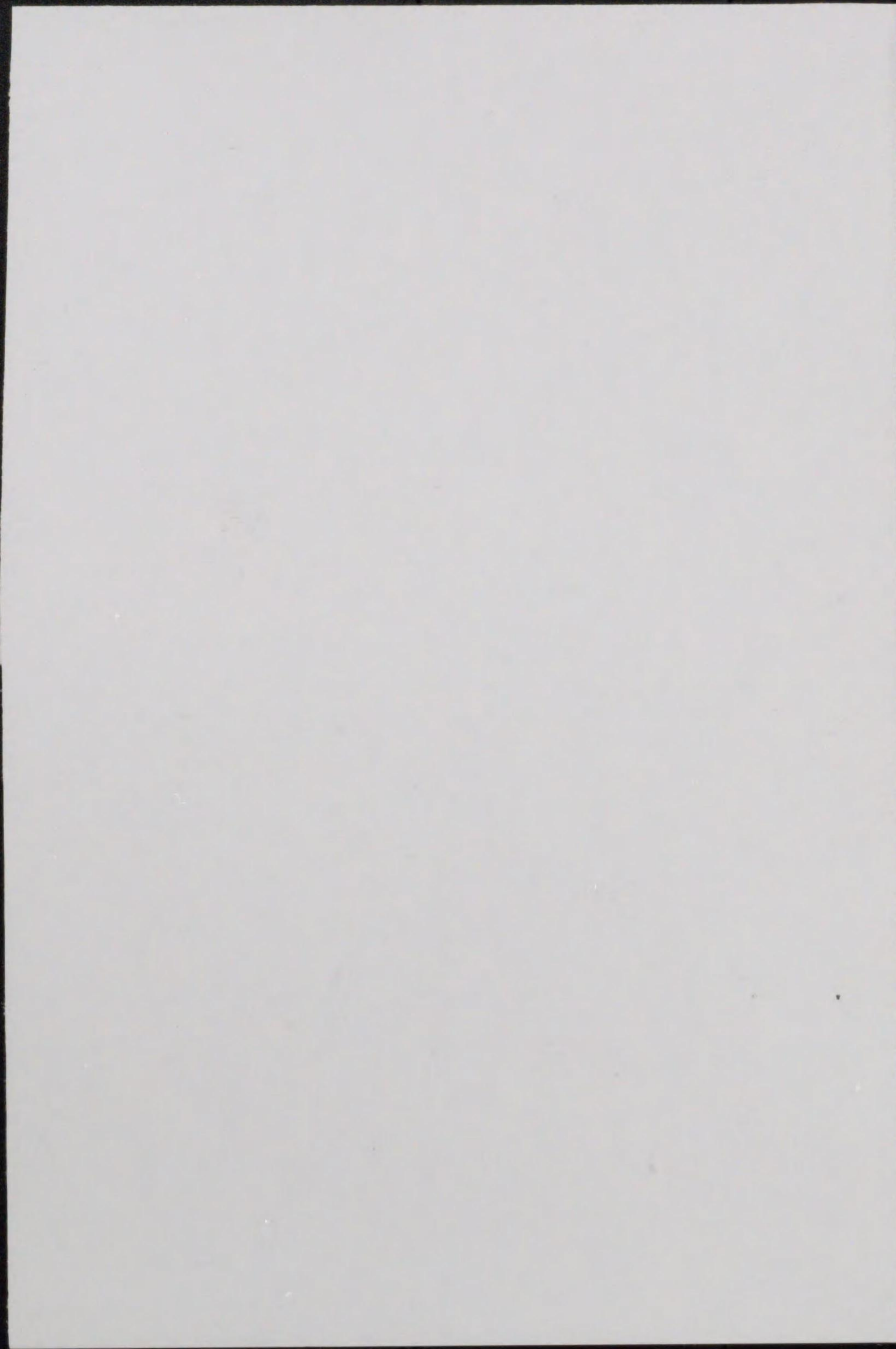
榮華物語	語	川上多助校訂
和漢朗詠集	山田孝雄編	
金槐集	齊藤茂吉校訂	
忠兵衛 梅川	冥途の飛脚	近松門左衛門作 和田萬吉校訂
博多小女郎波枕	近松門左衛門作	
西鶴織留	西鶴編 和田萬吉校訂	
開卷 驚奇	俠客傳	馬琴作 和田萬吉校訂
椿説弓張月馬琴作		
近世説美少年録	馬琴作	
小説浮世牡丹	山東京傳作 和田萬吉校訂	
本朝醉菩提	山東京傳作	
浮世風呂	式亭三馬作 和田萬吉校訂	
浮世床	式亭三馬作 和田萬吉校訂	
謠曲集	野上豊一郎編	
舞の曲	本野上豊一郎編	
申樂談	義世阿彌原著 野上豊一郎編	
竹の里歌	正岡子規著	
子規俳句集	正岡子規著	
道規俳句集	正岡子規著	
十三年夜	その他 樋口一葉著	



569  
14

検 察 官	マ ノ ン レ ス コ ー	ヘル マン と ド ロ テ ア	佛 蘭 西 文 學 史 敘 説	陶 淵 明 詩 集 <small>(附桃花源記 歸去來辭)</small>	啄 木 歌	左 千 夫 歌	中 野 逍 遙 集	志 賀 直 哉 短 篇 小 説 集	そ の 妹
米川正夫譯	河盛好藏譯	佐藤通次譯	關根秀雄譯	幸田露伴校閱 漆山四郎譯註	若山秋水編	齋藤茂吉編	笹川臨風編	志賀直哉著	武者小路實篤著
三 人 姉 妹	白 鳥 の う た	路 上	現 代 の 英 雄	死 刑 囚 の 最 後 の 日	痴 人 の 告 白	エ ピ ク ロ ス の 園	ド ン ・ キ ホ ー テ	ラ ム 沙 翁 物 語	ヒ ル 樂 園 喪 失
米川正夫譯	米川正夫譯	米川正夫譯	中村白蓮譯	ユイゴイ作 豊島與志雄譯	ストリントベルク作 和辻・林共譯	アトールフランス作 林達夫譯	セルヴァンテス作 永田寛定譯	野上彌生子譯	藤井武譯





岩波